

本道

第一卷
第二卷
第三卷
第四卷

月一號

- 徹底せる信仰と嚴正なる秩序 「信仰より来る臣道」
- 思想問題の研究 「人生の動亂と絶對の救濟」
- 『教行信證』信卷講話 願成就釋 「廣轉釋」
- 求道の文字について
- 切迫せる現下の思想問題
- 信仰と實人生 「信仰より来る人生觀」
- 遠慮なき告白
- 求道會館建築經過

求道第拾貳卷第參號目次

▼徹底せる信仰と嚴正なる秩序

▼思想問題の研究

人生の動亂

律法主義

放縱主義

絶對の救濟

▼求道の文字につきて

▼遠慮なき告白

▼「教行信證」信卷講話

榆山錦光
近角常觀

第九席 願成就釋

一、真念は即是一行
二、御助けが此方の積りては何もならぬ
三、大悲の仰せをきけ
四、一念即は真心等
五、佛の眞實と
私の不實
六、私の経験
七、私の不實を捨てぬ眞實
八、堅固深信等
九、憶念等
一〇、大慈悲は佛道の正因
一一、是心作物、是心是佛
お助けはお慈悲をすかした言葉
一四、お慈悲との相接に勝つて居る
一五、如實修行相應等

▼切迫せる現下の思想問題

近角常觀

一、律法主義と自然主義

二、信仰より来る人生觀

▼求道會館建築經過

▼會館構造概況

前號要目

▽實生活と真宗教

〔世間虛假、惟佛是眞〕

▽「教行信證」信卷講話

第七席 同

近角常觀

▽歎異鈔講義

第十三章(承前)

▽初めて如來の眞心に接して、六十年來

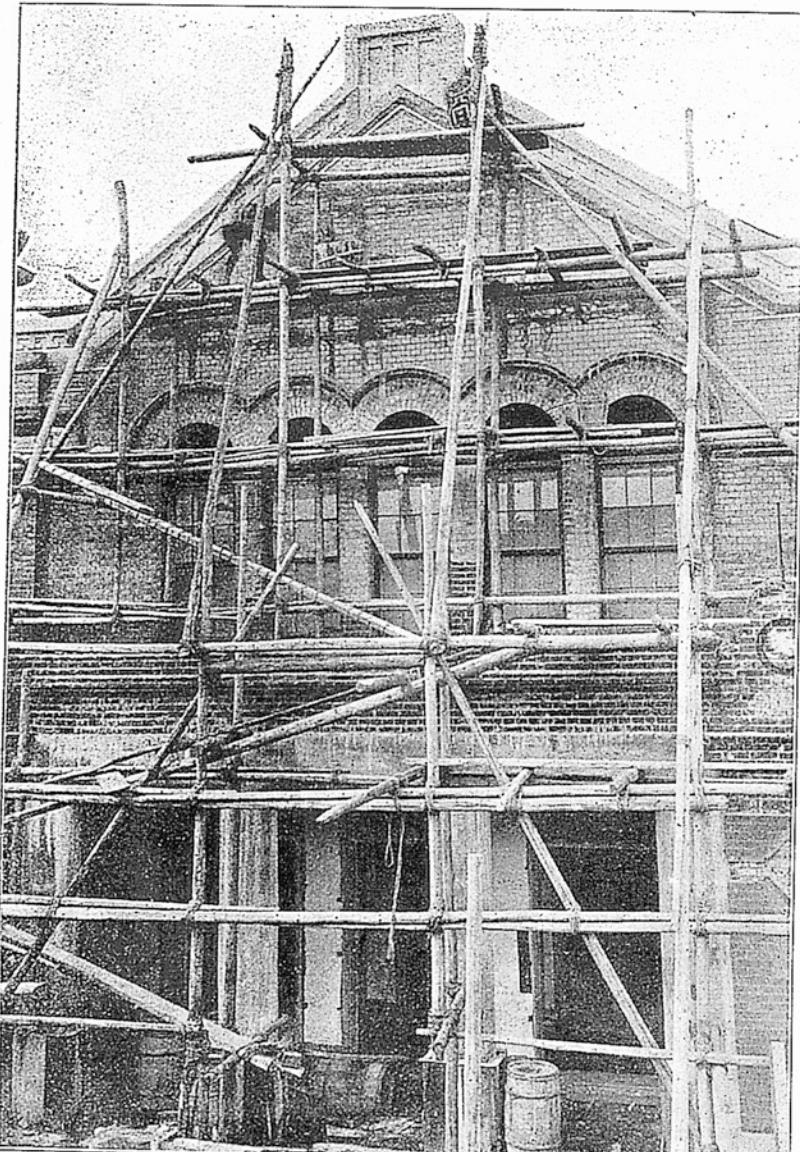
聞法の非をさとる

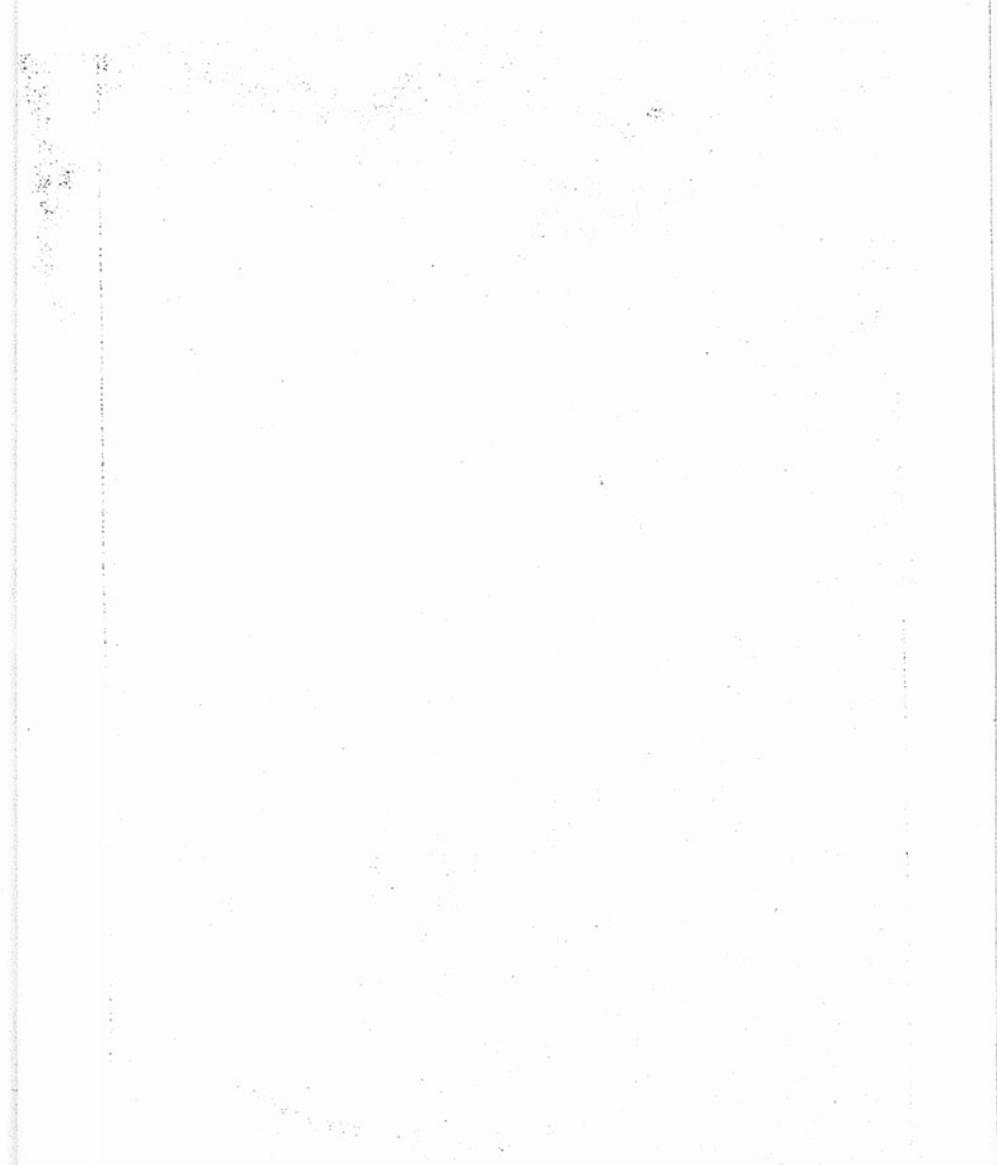
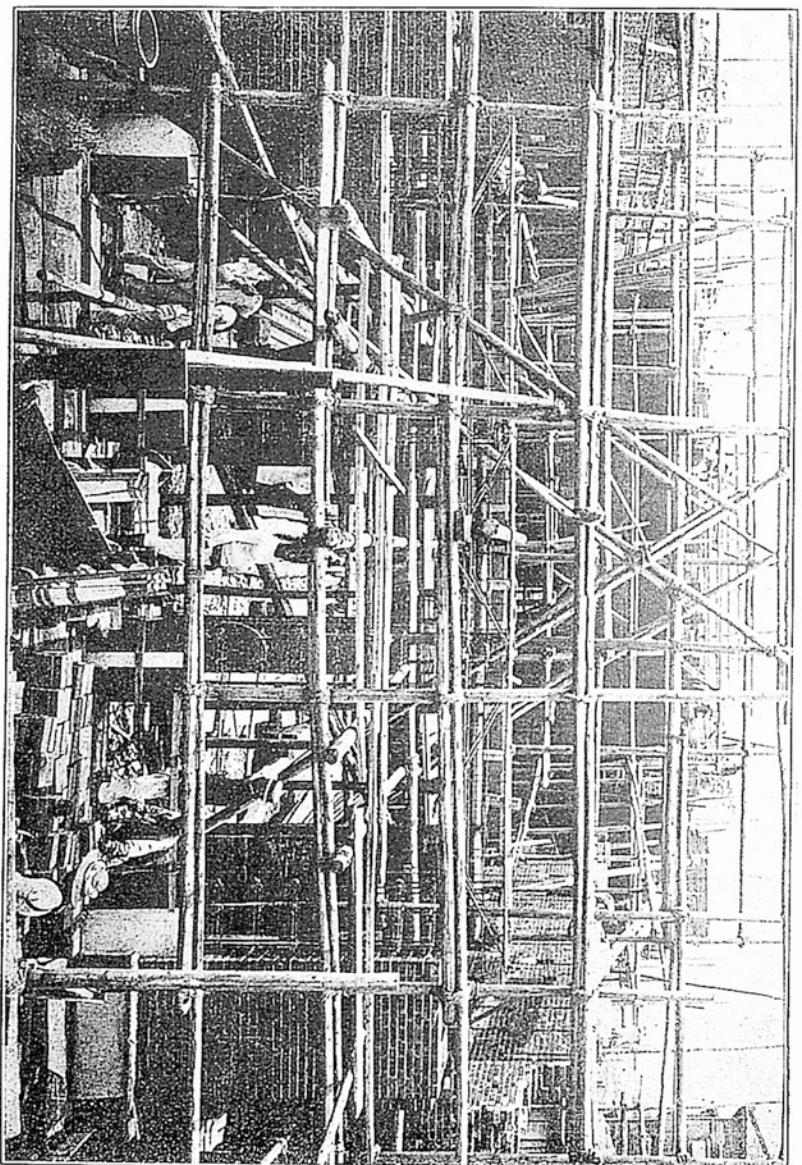
前田清次郎

▽今迄は自分といふものを棚に上げて居た

前田はる

▽求道講話概況





徹底せる信仰と嚴正なる秩序

今や正に千載一遇の御即位の大典に遭遇したてまつる奎運に膺つた。普天の下、率士の濱、寶祚の無窮、聖壽の萬歳を祝し奉る次第である。茲に我等平素信仰にたづさはるものは、信仰の徹底を期して、思想界に嚴肅なる秩序的觀念を振作し、精神上に君臣上下の分、天地剖判の如く明らかなものあるを自覺せしめ、以て聖恩に奉答したてまつる道を講ぜねばならぬ。

聖德太子十七憲法第三に曰く、承_レ詔必謹、君則天_レ之、臣則地_レ之、天覆地載、四時順行、萬氣得_レ通、地欲_レ覆_レ天則致_レ壞耳、是以君_ニ臣_ニ承_ク、上行下效、故承_{テハ}詔必慎、不謹自敗とあるは明らかに、篤敬三寶の信仰より、秩序ある人生生活の根本たる國家君臣の大則天地の如く動きなきことを説明せられたるものである。

此憲法を以て、世間一樣の律法的教訓として見て

は、聖德太子の深遠なる信念と労功なる善導とを服膺したるものとは言へない。聖德太子は三寶を興隆して民衆をして先づ中心より自己の我慢を折らしめ、如何なる罪惡も其救濟を被りて初めて恩澤の饒なるを感じしめ、茲に臣道なるものあることを知らしめたのである。十七憲法に於ては屢々臣道なる文字が用ゐてある。我等臣民として 元首に對したてまつるの道としては、忠の文字よりも寧ろ臣道なる文字の、適切にして且つ嚴正なるものがある。何んとなれば臣道は是れ信念より顯はれたる差別秩序の一絲素るべからざること、實に天地の如きあるものを表現されてあるからである。天覆ひ、地載す、四時順行し、萬氣通するこ

とを得とある所以である。

維新已來、文物燦然、制度に、教育に、智識に、言論に、殆んど悉く盡されてある。知るべきもの、學ぶべきものは知り盡し、學び盡されてある。唯殘されたものは如何にして實行すべきか、實行の動力となるべき信念は、如何にして得べきかの問題である。切言せば思想界の淵源に遡りて、人生々活の全般を支配すべき精神的基礎を形作ることである。而も其思想界なるものが未徹底なるときは動亂を來すの虞がある。是聖德太子が地天を覆はんと欲すれば、則ち壞を致す耳と言はるゝ所以である。吾人信仰問題にたづさはる者、信仰の徹底に意を注ぎ、國家に奉答すべきは正に此點である。古來の宗祖私かに誠心誠意信念を以て朝家國民のために、憂國の涙を捧げられたるは是である。

親鸞聖人の消息に曰く、念佛まふさん人々はわが御身の料はおほしめざすとも朝家の御ため、國民のため念佛をまふしあはせたまひさふらはぐめてたくさふら

態度を以て愚禿親鸞の文字を以て奏聞したまひしことを。徹底したるの信仰は、絶對信順の態度を人生生活の上に實現し來らざることなし。

大正の時代は正に思想をして秩序あらしむるの秋なり、信仰をして徹底せしむるの機運なり。是啻に我帝國に於てのみの問題にあらず、世界の問題である。東

二

ふへしと。之を以て古來動もすれば一種の律法的教訓の如く見做し、普通の世間道を説かれたるものゝ如く考ふるは頗る淺薄なる見方である。夫ならば宗教としての特色は何處にある。猶後世甚しきに至りては、其當時々の風潮に順應し、世間に苟合するの口實にまで供せられたかの感がある。かくの如くんば念佛すべしの文字を何と見る。而も親鸞聖人は其根本信念を徹底せずんば、此の如き感恩報謝の念想を生ずる能はざる。曰く、往生を不定におぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし、わが御身の往生一定をおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩の爲に御念佛こうろにいれて申して、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとぞおぼえさふらふ、よく御案さふらふべし、このほかは別の御はからひあるべしとはおぼえずさふらふと。此に至りて初めて知る、聖人流罪勅免の日、恭虔の

洋の問題のみにあらず、歐米思想界の問題である。是吾人が粉骨碎身聖明に奉答し奉る所以である。今や八千萬の臣民は心を一にして聖壽の萬々歳を祝し奉るに方りて、四海兄弟同一念佛の信念を徹底せしめて、天下覆地載の臣道の大義を闡明し奉る次第である。

思 想 問 題 の 研 究

人生の動亂

◎今や世界の動亂は正に醜である、而して是やがて世界思想界動亂の結果である。我日本も亦此世界動亂の影響を蒙りて、亦其渦亂中に投じつゝある。歐羅巴の動亂が今日初めて來るにあらずして、近代文明の結果が此に到らねばならぬ運命を持つて居つたので、二十

世紀の弊頭に此の如き幕を開き來つたことは更に不審ではない、寧ろ其遲かりしを怪む位である。して見れば世界の動亂は決して輕々に看過すべきではない。而して其根本たる思想界の動亂は、心を潜めて講究を怠りてはならぬ。而て近時著しく現はれ来る百般の動亂は、其根ざしを思想界に持て居ることは明らかなる事實である。是思想問題を忽にしてはならぬ所以である。

○此の如き大問題を提供し來りて如何にして解決すべきかといふに、決して聲を大にし、若しくは思索に始め、論議、經營、冥想、努力などの方法を以て歸結を見出すべしではない。然らば如何にすべきかといふに、畢竟各個人が自身の問題として取扱ふことを忘れてはならぬ。歐羅巴の動亂も畢竟するに各個人の思想界の投影に過ぎないのではないか。各個人の方寸は畢竟世界の縮寫圖である。我等は決して世界の動亂、思想界の動亂につきて責任あることを忘れてはならぬ。責任を分つとは云ひたくない、寧ろ各個人が全責任を持たねばならぬと云ひたい。寧しろ責任を持つといふ様な廻り遠い且つ冷淡な言を用ひずして、直言せば直に是れ我等が胸中の表現である、我等が罪惡の顯現であると斷言せねばならぬ。

○此の如く観じ來れば畢竟各個人思想動亂の問題である。如何にして各個人の動亂せる思想上に歸結を見出すべしかといふ問題である。是實に信仰問題である。

里^{レトモ}然^{レトモ}上和下睦諧^ニ於論^ニ事^ニ、則事理自通^{シテ}何事^ヲ不^レ成^ス、是實に古今東西に通じて、易はらざる人心動亂の根本原則である。歐羅巴全體の動亂も畢竟人皆黨あり、亦達する者少しだ。近時政界の同黨異閥も畢竟各自是非善惡の争である。人間は自分を是とし、人を非とする心の止まぬ間は、結局動亂は止まぬ次第である。此に於てや是非善惡の争を止めよといふ律法主義を生ずるのである。

律法主義

○思想界の根本問題を解決するについて、現今思想界の潮流を明らかにする必要がある。思想界の問題は、千古萬古同一の軌道をば變りたる形式を以て繰返して居るのである。即ち律法主義と、放縱主義との衝突である。從來政治、教育、修養にたづさはる人は皆律法主義を以て何々すべし、何々すべからずと訓戒するのである。宗教と雖古來信條を以て強て統一を保たんと

自身の問題である。信仰問題が直に是れ人生問題であることを忘れてはならぬ。自身の問題が直に世界の問題であることを忘れてはならぬ。人生の問題といふも世界の問題といふも、大なる様なれども、畢竟するに五分、五分の争の問題である。獨逸が英國を敵とすれば英國は獨逸を敵とする。獨逸が英國を敵とすれば英聯合諸邦と握手する。強食弱肉、優勝劣敗の有様は人間世界の罪惡の眞相である。經文に所謂強者伏^レ弱、轉相尅^レ殺、殘害殺戮、迭相吞噬とあるが即是である。我彼を食まずんば、彼我を食まん、我彼に食まるゝを安んずべきか、我敢て彼を食まんか、佛になるか、鬼になるか、遂に中間の人間たることが出來ないのである。極東の日本も歐羅巴の渦中に投ぜざるを得ぬのである。伊太利亞も永久中立たることを保つことが出來ぬではないか。

○十七憲法の第一に曰く、以^レ和爲^レ貴、無^レ忤爲^レ宗、人皆有^レ黨、亦少^ミ達者^ヲ是以或不^レ順^ニ君父^ヲ乍^ニ于鄰

試みるのが律法主義である。必しも他より壓伏せずとも自ら信じたいとか、喜びたいとか、分りたいとか、頻りにもがくのが皆律法主義である。即自力といふは律法主義である。たとひ言語は正鵠なる文字なれども、其意味のとり様によりては律法主義になる。法然聖人が本願念佛をすゝめたまひし時に、毫髮も自力の念佛といふことのあるべき筈もなく、聖人にしては其様なことがあるべしとも思召さんだであらう。されど稱へざるべからず、勵まざるべからずといふ定散心を以て修するときは、其念佛すらも自力念佛になる。其通り信心と雖、信ぜざるべからず、喜ばざるべからずといふ定散心を以て迎ふるならば、自力の信心となるのである。此點を極言せられたが親鸞聖人の本願他力真宗である。

○現今、日本の政治若くは教育にたづさはる多くの部分に向て、大に注意を加へたきは律法主義である。頑固と名づけられる部分は皆嚴格なる律法主義である。

官僚主義とか、刑名主義とか、名ばらるゝものが是である。忠孝の如きは全體律法主義であるべき筈のもの

無二端、是以彼人雖懼還恐我失、我獨雖得、從衆同舉とある、是實に人類が肅みて拳々服膺すべき金言である。

◎全體律法主義を以て善を爲せ、惡を爲すべからずといふも、此の如く何人も、自分を是とし他を非とするの心其物が既に間違である。親鸞聖人が和讃に

よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのこころなりけるを

善惡の字しおりがほほ

是非しらず

小慈小悲もなナレジも

忠も畢竟天皇の御召に感激し奉りたる結果でないか。徒に律法主義を以て現代の青年に臨むの結果、遂に唱ふる人の心事まで疑はしひる様になる。是大に謹むべき點である。

といふ、其根本の是非善惡が怪しいものである。十七

各有レ執、彼是則我非、我是則彼非、我心非レ聖、人必非レ
ナリ

愚共、是凡夫耳、是非之理、詎能可定、相共賢愚、如二環

放縱主義

○今や我國思想界は種々の形を以て放縱主義が瀕蔓して居るのである、是最も憂ふべきことである。特に近代思想の文藝なるものは頗る放縱に流れてある。自然主義の名の下に自分勝手の考に陥り、人間本能の口實を以て各個の自由を主張するのである。此に於て從來律法主義を以て拘束されたる羈絆を脱して、各自放縱の途に就かんとするのである。殊に人生若くは生の名の下に、各人別々の生活を營まんとしつゝあるのである。而して囚れざる思想とか、放たれたる思想とか、自覺とか、生くるとか名けて不統一なる思想の混雜を來しつゝあるのである。

○而して此等の思想に於て、最も戒心すべきは從來の
律法主義に對する反動として、不秩序なる主義の起る
ことである。例へば官僚主義に對する反動として、憲政
擁護運動が起り、嚴刑主義が起れば、自然殘酷なる犯罪

べきものはない。

◎抑々眞面目の意味に於て、我等は眞實に如何なる實行を爲し得べきか。此に於て選擇集に所謂破戒、無戒、愚痴、無智、少聞、少見、貧窮、困乏にして發菩提心も、

が行はれ、形式道德に反して悪平等觀が起ることである。此等の思想が今日最も憂ふべき現象である。律法主義が決して生命ある秩序觀念を養ふとは出來ぬが、放縱なる惡平等主義があらゆる罪惡の根本となれるは著しき事實である。

◎今日青年の多くは未徹底の思想を抱きて行きつまつて居るものが多い。理想を高くするがために畢竟實行することが六ヶ敷なりて煩悶に陥り、自分ぎめの信念を抱きて自覺せる者なりと誤信して、實際界につき當たりたり、空疎なる理論を追ふて空中に樓閣を書き、主觀的に冥想に耽りて懈慢界に陥り、あらゆる罪惡のたるものに貢献せしものゝ多也。

めに呵責せられて、一分一厘動けぬ様になりてゐる。かくの如く観じ來れば人世の事一として眞實として認む

孝養父母も、奉事師父も皆不可能である。所謂五逆十惡の我等である。我等は手も足も出なくなる。此の如くして我等は罪惡の塊として唯信仰の徹底によりてのみ救濟さるべきである。

○選擇本願は正に此等の罪惡の一々を觀そなはして、恰も一々同情の涙を以て融かしたまふ慈悲の親心である。此慈悲の塊が如來である、其如來自身が念佛に於て現はされてある、即ち念佛成佛是真宗である。

絶對の救濟

○他力真宗といふは決して宗旨の名として起りたのではない。如來の眞實を宗とするのである。抑々我等は動亂の人生に於て是非善惡を争ひつゝ、律法主義の廢惡修善を爲すあたはず、放縱主義の煩惱罪惡を脱する能はず、致しかたなき不眞實なる我等を飽まで見捨てたまはぬ眞實の大慈大悲が本願他力真宗である。言ひ換ふれば人が生きんが爲に人を食まんとする貪戾極り

れられて仕舞ふのである。是が實に救濟である。我等が極濁惡も如來の清淨眞實のために取り去らるゝのである。是が拯濟である。如何にしても我を折り、自己を捨てるこの出來ぬ我等も、飽まで己を捨てゝ施したまふ如來の眞實には頭が下り、我を折らるゝのである、是が如來往相の一心によりて生死の根本が断たれたのである。横截五惡趣、惡趣自然閉てある。茲に人生に是非善惡の爭の根が絶たれて、如何な罪惡深重煩惱熾盛の我等も、如來大悲の御惠の爲に融化されるのである。是即煩惱苦提體無二である、煩惱の氷融けて功德の水となるのである。茲に於て世界の平和も實現すべく、人生の安樂も顯現すべしである。茲に人生の動亂も、思想界の動轉も最後の光明界に達せられるのである。

○最後に一つ忘れてはならぬことは、我等は、たしかに此如來の御心に接する一念に、永劫の流轉輪廻の根本はたしかに斷たれたのであるが、決して此世に存在せんかぎり我等が直に其絶對の佛にはなれぬのである。

此世夫 身は五濁惡世の人生である、併一念の立所に其歸趣を見出したのである、自己が救濟されたのである。信仰は自己の問題である、此の如き絶對者に遇ふて見れば、他は如何にあらうとも、自己自身が救はれるのである。本願力にあひねれば、むなしくすぐる人々なき、功德の寶海みちくへて、煩惱の濁水へたてなし。是やがて各個人の平和の源である、家庭の平和の源である。國家の平和、世界の平和も畢竟此根源より實現しるのである。是聖德太子十七憲法第二篇敬三寶、三寶者佛法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗^{ナラ}、何世何人非^ニ貴^ニ是法^{ナラ}、人鮮^ニ尤惡能教從^{レハ}之、其不^{レハ}歸^セ三寶^{ナラ}何以直^{レハ}枉^{ナラ}と宣へる信仰徹底の極致である。

「私は悪い者でございます」

從來の聞法者の中には「口目には必ず、私は悪い者でございます」と答へられる種類の方がある。それ故「それで何うなさる」と押すと、今度は詰まつて「だから出来るだけ善くするのだ」と、雙方答へになつて來ることが屢々ある。「出来るだけよく出来るのなら、始めから問題は無い譯である。如何によくせんとするも、その出來ざる私の心中を察して、飽く迄眞實にして下さる御親切の程を頂かねばならぬ事である。

なき私に向て、如何程にても身を捨て、身體を施し、自己を擲て與へて下さるが御佛である。否我等が貪戾の心を満たしむるべく飽まで御身を捨てたまひしが大慈大願である。五劫思惟の御苦勞である、兆載永劫の修行である。此絶對の大悲廻向によりて如何なる我慢な我等も、爭深き衆生も頭が下りて、あやまりはてるより仕方がない。如何な不眞實なる我等も其如來の眞實によりて滅さるゝのである。

求道の文字につきて

◎親鸞聖人が求めたから得たと申されたことはない。

偶々行信を獲は、遠く宿縁を喜べとか、本願力に遇ひぬれば、むなしくすぐるひとぞなきとある。求道の文字を律法主義にとれば所謂自力の大菩提心になる。

勿論他力に入る手引には違ひなけれども、自ら求めた力で得るのではない。其位ならば求道の文字を撤回したらばよいではないかといふに、他力の信心を聖人は淨土の大菩提心と仰せらるゝ。もとより如來の求道發願より起るのである、故に他力の信相にも求道の意味あり。善導大師が以光明名號攝化十方、但使信心求念、といひ、又涅槃の信求、聞思の如きが是である。

かく言へば所謂文證でも並べたて、教權を主張する律法主義と誤解してはならぬ。全體從來宗學なるものが全く文證理證の軍容を整へて擁護するが如く、又三國

信不能推求、是故名爲信不具足。

信復有二種、一從聞生、二從思生、是人信心從

聞而生、不從思生、是故名爲信不具足。

復有二種、一信有道、二信得者、是人信心唯信
有道、都不信有得道之人、是名爲信不具足。

云云。

此文は一步誤れば自力に陥り安いのである。求めねばならぬ、思はねばならぬ、善知識の言は如來の仰と信ぜねばならぬと誤りて、信心を求められぬ、難有いと思へぬ、如來の御言と信せられぬといふて歎く人がある。是皆律法主義にとりたから皆間違てるるのである。御文の歸命の信相を、後生たすけたまへとたのむと仰せられたのを、たのめぬくで苦しむのが皆律法主義に誤解するからである。

◎法然上人も選擇本願の中には發菩提心を擇びてたまふてあるのである。親鸞聖人も自力聖道の菩提心、心も言わよばれず、常沒流轉の凡愚は、いかでか發

祖師の間柄を所謂會通辯護するが如く考へるが根本の誤である。歎異鈔などに證文呼はりをする時から、はや律法主義に誤り安いのである。併歎異鈔には明らかに聖教には眞實權假相交り候なり、權をすてゝ、實をとり、假を擋きて眞を須ること聖人の御本意にては候へ、かへて、聖教を見亂らせたまふまじく候とあるが、

全く信の一つを以て取捨するので、毫も律法主義の意味はない。聖人の教行信證は聖人の信眼に映じたる眞實權假の御自督である。夫が動もすれば聖人が何か眞宗を打立てるべく、文證理證の陣容でも整へられた様に考へて居るのが誤である。

◎幸ひ、涅槃經の文につきて求道者の誤り安い點を舉て見よう。曰く

善男子信有二種、一者信二者求、如是之人雖復有

起せしむべきと仰せられた。律法的の自力の求道心の一分も一厘もなし能はざること此の如してある。

◎此自力の發菩提の出來得ざることを知るしめして、此の如きの我等を憐みたまふ大慈大悲か如來の發願である。又我等の自力廻向の出來得ざることを知るしめして、我等がために施惠したまふ如來の大悲が他力廻向である。又同様に孝養父母も奉事師長も、乃至一切の諸善萬行の出來得ざることを知らしめして、此の如き何れの行も及びがたき地獄必定の我等を、飽まで見すてたまはざる如來清淨眞實の塊が念佛一行である。此に於て一切の律法主義は皆碎かれて仕舞ふのである。

所謂自力根性は悉く根を絶たれて仕舞ふのである。律法主義を碎きたる消極主義一方のものではない。其律法主義で一分も一厘も成立ち得ざる我等が爲には、あらゆる萬善萬行を修せられたのである。即如何なる消極をも満たすべき大積極の塊が、他力大行の念佛で

ある。猶分り安く人生問題として叙述せば、貪欲、瞋恚、愚痴の我等に對して、清淨歡喜智恵の力を以てし、如何なる缺陷に對しても飽まで圓融圓滿の德を以て満足せしめるゝのが他力廻向の大行である。

○此の如く自力律法主義の碎かれただけ、飽まで満足せしめるゝのが他力眞實の御慈悲である。すべてに於て消極であるだけ、こと／＼之を満たさるゝ能令速満足、功德大寶海の大積極である。他力眞實といふは極惡最下の我等をして極善最上の力を以て充實せしめるることである。當レ知此人爲レ得ニ大利、則是具ニ足無上功德」とあるが是である。かくて、人生一として眞實なるものなく、悉く罪惡ならざるものなき我等は、全く如來の清淨眞實を以て改造鑄治せらるゝのである。かくてあらはれ来る聞思のこゝろも、信求の念も淨土の大菩提心も、一として眞實信心の現はれたらざるものはない。念佛も經營も報謝たらざるはなく、忠も孝も悉く信仰の實現たらざるはない。粉骨碎身報恩

遠慮なき告白

檜山錦光

心に後生をたのみまゐらせんとすれども、私の描く阿彌陀佛は、思想と共に動搖する。抑も私の安心に對する説明が、頗る透明を缺いて居るが如く、内心は更に疑惑動搖、一層溷濁して居たのである。

先づ私は第一に、信仰の中心を確定樹立する必要に迫られ、斯くして阿彌陀佛の研究が、先決問題となつた。

曾て「佛法は如來の威神力にまかせて無責任なり云々」と云ふ一句を、どこかで讀んだことがある。素より私の淺薄なる思想で、彼は申す資格も用意も無いのであるが、その時私の頭に浮んだまゝの解釋を申さば、往生極樂は結構ならんも、當面の現世問題に活動を要する今日、後生問題に没頭して、念佛三昧はあまりに消極迂遠ではあるまいかと、不安なるさゝやきの聲がする。何事も佛智不思議に委せて、單純なる信仰に安ぜんとするも、理性は依然として疑問の頭を擡げる、稱名念佛はそれども、根本に力が入らぬ、唯一

の誠を盡し、動靜出沒悉く大悲の御心に信順する様になる。かくて全然律法主義を蟬脱したる活動を實現し來るのである。他力を誤解して無氣力無活動の如く思ふて居るものが多い。親鸞聖人は他力といふは如來の本願力といふて居らるゝ。如來利他的信心といふて居らるゝ。我等は此の如き絶對の力に信順して生活するのである。

花祭りの歌

(求道日曜學校)

(一) 大聖世尊いてまして、今三千とせになり給ふ。

花の御堂にみすがたな、ことほぎまつる誕生會。

(二) 花さき香ふラビニ開、天上天下唯ひとり、我尊しとのたまひし、みこゑはいまもせにひぐく。

(三) ほとけ此世いてまして、大御心はわれひとに、あみだほとけのみめぐみを、しらせんためととき給ふ。

(四) 父と母なるみほとけの、慈悲のひかりにいだかれて、御名をとなへつぼらからが、つどひあそぶぞたのしけれ。

う、烟のやうに想はれて、折角の佛もホツトケとなり、信心は生氣なき死信となつて、私には却つて信仰の立場を失ふやうなことになつて來たのであつた。

又た或る先輩の方よりは、「真理は蠟を喰むやうなものである、これに情の血をかよはせ、意思の肉をさせ、着色鹽梅した處に宗教が生れて來るのである」と云ふ意味の談話をしてくださつたこともある。私には、この真理と云ふ意義からがそもそも明瞭に解せられて居ないから、何共臆測を加ふべき資格は無いのであるが、勝手に解釋して思ふには、これは宇宙を時間的に堅てに論究して、無色無形に到達したる究極を、真理と呼び、如來と名けたものであらう。さうすると、虛無寂滅の真理には呼吸が通ふて居ないから、紅を指し白粉を塗り、脚色して舞臺に上ぼせ、紋十郎にあやつらせたる處に、初めて宗教が生れて來るのであると云ふ意味に聞えたのであるが、お釋迦様を紋十郎に、阿彌陀様を人形に、宗教を文樂座の人形芝居に聯想することは、説明の筋道は面白いが、頗る中心には納得がゆかなかつた。併しながら、若し眞にそれが、戯曲的仕掛けであつたとすれば、愚夫愚婦の眞宗じやと云はれ

する焦慮の態度となつた。が十萬億士の西方は遠きに過ぎ、去此不遠は近きに迷ひ、靈界溟々として捕捉すべからず、雲烟深く闇を鎖して、途漸く絶へたるの光景であつた。

二

進むに途無く、退くにも由無き私は、徘徊流離のはて、何時かはなしに漂然として、本郷なる求道學舍に漂着し、爾來近角先生の御講話を拜聴させていたゞく御縁に遭遇したのであるが、御縁と云ふものは、全く思ひがけないことである。

先生の、反覆叮嚀なる御講話は、甘露の如く心肝を濡ほし、明朗徹底せる御法話は、快刀の如く疑網を斷つのである。何時も人生問題の上に、大慈大悲の遺る瀬無き御眞實を、水も漏らさぬやう、ピッタリと被せかけて話して下さる所は、何時聞いても難有く、幾度聽いても新らしく、只管ら悲喜の涙に咽ぶの外はないのである。

第五回夏季求道會は、七月四日求道學舍に於て開かれ同十一日に終つた。内地各方面は素よりのこと、遠

ても、仔細なさうに思はれて、また頗る不安であつた。

如何にも如來の見立やう、宗教の説明は、各派の宗旨に依て一樣でないことは勿論ならんも、餘宗に於ける詮議は暫く措き、淨土真宗の立場から、かうした思想を進めて來ると、私には、真宗の面目が何れにか消失して、ます／＼深く迷宮に入るのみであつた。

退いてつく／＼、元祖法然上人や、開山親鸞聖人の御一代に於ける、佛恩讚嘆の御態度を拜察するに、我が真宗の信仰對象は、宇宙の實體を崇拜するのでもなければ、勿論假定の如來でもないと云ふことは、私にも想像がつくのである、「能發一念喜愛心」とか「獲信見敬大慶喜」とか云ふ、熱烈なる慶信の態度は、必ず依つて來るべき、他に直接經驗し玉ふたる、顯明にして偉大なる對象の佛が居まさすはならぬと、心竊かに獨斷を下しつゝ、ます／＼如來に對する思索に歩を進めつゝあつたが、要するに、未だ自己の信眼に映せざる如來の探索であれば、他人の倉に祕藏せられたる寶の詮議に過ぎなかつた。是に於て、あくまで如來の所在を探りあて、自ら直接に經驗せざれば已まざらんと

くは滿韓や南清の地方より、態々會合せられたる篤志の同行も見受けたる程の盛況であつた。左りながら遠慮なく申さば、現在の學舎は、軒傾き壁破れ、外觀頗る振はないのであるが、併しその、充實せる内容の本質に至つては、恐くこの上も無い難有い求道の學舎として、私は至極の敬意を拂つて居る。

朝七時に勤行が始まり、續いて日中の御講話に入る。夜は七時より信仰談話會が始つて十二時に亘るが、先生の御退出が、夜半を過ぎて、二時三時になることは稀ではなかつた。炎天七月の暑さにも拘らず、紅塵萬丈の巷に、遠近より參集せる同行の熱心もさることながら、これに大悲の法水を漉いで、眞實の淨信に徹到せしめんば止まざらんとする、親切にして熱心なる先生の御態度に接しては、唯々感激の外は無かつた。私は、大悲の慈光に輝いたるこの難有い光景を、直ちに七百年の昔に逆轉して、親しく當年に於ける、吉水の禪房を偲ばずには居られなかつた。

し平和を欲求する、努力平和の要求を充たさんとするには道徳を高調せねばならぬ。而して、道徳の振興を圖るには、更に宗教の力を利用せねばならぬ。是に於て宗教は人生の意義を完うせしむる上に於て、最高の權威を有するものなり。とは私が平常宗教に對して、懷抱せし期待であつた。斯くて、この期待に副うて、律法道德の振興に資すべく、利用の目的に供せらるる、對現世的一面を所謂俗諦門なりと解し、後生御たすけの、對來世的一面を以て眞諦門と見たる、一舉兩得の期待が、私の眞宗に對するかいづまんだ觀察であつた。

今日偶々先生の御講筵に參聽する機會に接し、泌々と、超世の本願、難思弘誓のよいはれを聞かせて頂き、絶対の眞實、無礙の慈悲てふ、佛の明鏡を高く掲げて、我が相對世界の上を照破し玉ひ、隈なくその眞相を指示せらるゝに反んで、始めて、願力の廻向にて靈界の光明に夢覺めざる者の前には、人生は空しく生存に意義無きことを、つくづく悟せしめられた。道徳法律の制裁や、政治科學の進歩を以てしても、抑しても突いても、頑として動かないものは、この人生

かるべし、奇特最勝、時機相應、本願他力、眞實信仰の宗教に遇ふて、こゝに始めて救濟の意義あることを知らしめられたのである。

して見れば、釋尊一代佛教の中より、理想的權假宗教の幕を切り落して、世尊興世の正說なる、純救濟的眞實教の、全幅の眞面目を鮮明に露出したる淨土真宗に向つて、雜行雜修たる利用を要素として求めたる私の見やうは、律法信仰の異なる兩主義を混同して期待したる、淺薄なる誤謬であつたことは明瞭に知られた。既に私の人生觀は根本より顛覆せしめられ、次いで茲にまた、眞宗に對する私の觀察にも一大革新を來したのである。

抑も阿彌陀佛は、本體的究竟の虛無を抽象したる假定の佛では無い。さうしてその佛は、永劫の昔より常住である。阿彌陀佛の超世本願のよいはれを聞き、他方廻向の催しによつて、初めて遣る瀕無き大悲の御慈悲に出值ひ、忽ち長夜の夢覺めたる味ひを、一念發起と示し、信心獲得と知らしめられてある。この信心は如來願力廻向の信心にして、我より廻向したる信心にあらざれば、やがて他力信心と申すことの旨知られ

と云ふ爲體の解らない怪物であり、徹頭徹尾自己を中心としたる我利の相對世界である。渡るに舟無き難度の海、照すに光無き無明の闇とは、正しく人生の眞相相對世界の現状であることを痛切に感得せしめられたのである。穢惡污染、虛假詭僞なる言辭は、單に誇大的形容詞に過ぎざるべしと思ひ、今迄は餘所事他人事として聞き流して居たが、豈圖らんや、虛假詭僞は現に私の心の内であり、穢惡污染は正しく私の身の上であつたことには、今更ながら驚かされた次第である。

律法的人生の完璧を夢想し、之れが實現を期せんが爲に道徳の力を借らんとし、更に道徳の原動力として生れたる宗教は、自力聖道門の範圍に屬し、理想を遂うて進む宗教である。自力聖道の教は、人生に處するの規準として、正にこれ道徳の標的ではあるが、現にこれ常沒流轉虛假不實にして、自力聖道の教に相應せざる下根の私にとりては、この人生を如何にせん。妄心解脫、速疾圓融、「凡小修しやすき眞教、愚鈍ゆきやすき捷徑」に遇ひ、「攝取不捨の眞言、超世希有の正法」を聞かしめらるゝにあらずんば、永く出離の縁な

たり。一念我に他力廻向の淨信宿りなば、有無の見を離れて業繫の障を除き、貪愛の水に溺れず瞋憎の焰に燒かれず、横に五惡趣を截りて惡趣自然に閉ぢ、往生の業因平生に成辦して、正定の聚に入り不退の位に住すべしと示してあるやう私にはうかゞはれる。この決定信心の趣を眞諦門と云ふのではあるまいか。

水の如く冷刻頑固なる私共の自性も、一度御慈悲の光に遇ふて見れば、容易に熔解せしめられて巧徳の水となり、炭の如く愚痴闇黒なる私共の本質も、暫し御悔の情が起る。絶對無礙なる御眞實の前に立ち、廣大無邊なる御慈悲の中に生活し得る身となれば、人生の萬事日常の百般、凡てこれ自然法爾、佛光の照耀佛智の擁護を認めることが出来るのである。これを他方の活動と呼び、無我の日暮しと申すべき歟。信後に於けるこの情態を、俗諦門と呼ぶものと思はるゝが、詮ずる所、眞俗共に同じく願力の廻向である。

信心を獲得すれば、踊躍歡喜の心あるべきにとは、唯圓坊ならぬ私の不審であつたが、「佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば」喜

んでの往生でなきことに心付かしめられた「惡趣も自然に閉ぢ」「煩惱の水は解けて、即ち巧徳の水となる」との御示しもあれば、惡るいまんまの御助けでも無いことが了解せしめられた。往生淨土の種、安心決定の因は、ひとへに、他力廻向の淨信にありと知らしめられて居る。私の今日氣附かしめられて居る處の法味は、こゝまでである。

五

「故聖人のおぼせには、觀鸞は、弟子一人ももたず、とこそおぼせられ候ひつれ、そのゆゑは、如來の教法を、十方衆生にとききかしむるときは、ただ如來の御代官をまうしつるばかりなり、さらに觀鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法を、われも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり、そのほかは、なにををしへて弟子といはんぞ、とおぼせられつるなり」

「聖人のつねのおぼせには、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに觀鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけ

ひしか。」

歎異鈔の御文は洵に結構なことであります。

晝夜に亘り、倦まず撓み玉はずして、諄々と説き玉ふ先生の御化導は、言々句々、凡てこれ廣大なる如來廻向の御眞實であつた。五劫の思惟、永劫の御修業と聞かせて頂くことも、現にこれ常没流轉の私に對する、遣る瀬なき如來の御慈悲であつた。如來の所在證索に、永く流浪したる私の耳底に、今は圖らずも「汝今知らず、阿彌陀佛、去此不遠」の御文が、鮮かに活きて聞える、何事のおはしますかは知らぬども、感恩の念油然として起り、悲喜の涙潛然として下ることである。

「今此の娑婆世界は耽玩すべきことなし。輪王の位も七寶久しからず、天上の樂も五衰早く来る。乃至有頂も輪廻期なし。況んや餘の世人をや。事と願と違ひ、樂と苦と俱なり。富めるもの未だ必ずしも壽ながからず。壽ながきもの未だ必ずしも富まず。或は昨は富みて今は貧となり、或は朝に生れて暮には死しぬ。故に經には出息は入息を待たず、入息は出息を待たず

るを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐さふらひしことを、いままた案するに、善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみづねに流轉して出離の縁あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩の、たかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさららひけり。まことに如來の御恩といふことをばざたなくして、われもひともよしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおぼせには、善惡のふたつ總じても、存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こころに、よしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしどおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにてはおはしますとこそ、おぼせはさふら

と。唯眼前に樂み去りて哀み來るのみならず、亦命終に臨みて、罪に隨ひて苦しみに墮つ」

こんな深刻痛切なる御聖教の御文も、平素理想をのみ逐ふて走り、他に何物とも顧みる能はざりし私の眼には、徒らに進歩活動を障礙する消極的悲觀說として、あまりに價値を認むること能はざりしが、歷々眼界に開展する、相對世界の有様が、動かざる事實を物語りつゝあるに心付いて見れば、假令ひ如何程消極的悲觀說であらうとも、容認するより外致し方ないこととなつた。近くは、外か歐洲の慘憺たる著しき實例より、内は國家社會の紛糾たる現狀、乃至家庭や個人の日常事に至るまで、凡て人生悲觀の材料となつて、日々の新聞紙面を填めて居る。酒や色乃至浮きたる一時の榮華より、永く假寢の夢が醒めざれば幸なれど、一度相對世界の前に立つて、眞面目に人生を洞察すれば、悄然として肌に粟を生ぜざるものがあらうか。文明の潮流と共に、生存競争の波瀾は、澎湃として國家にも個人にも、西にも東にも瀕蔓して居る、「いかでか苦海を渡るべき」の嘆聲は、貴賤貧富を論ぜず、眞面目なる人の胸裡には、必ず潜む苦惱の呻吟であらねばならぬ。

特に今日は、青年の顔にも頗る不安の色を呈して來た。文明を呪ふではないが、刻一刻人の神經は衰弱に傾きつゝありはすまいか、人生を積極的に樂觀すべき根據が私には無い。

進むも退くも將た止まるも、憂苦に悩む私共の上に、萬斛の涙を灑ぎ玉ひ、遣る瀬無き同情を垂れ玉ひて、この苦境を憐憫し玉ひ、廣大なる大悲の御眞實を聞かせて頂いて、茲に私は、始めて無明の大夜に赫々の佛日を仰ぎ得たのである。人生が俄かに明るみになつたのである。この御眞實に眼を醒さるゝに至らずば、空しく無明の闇に迷惑するのみであつた。この御慈悲に心付かさしめらるゝにあらざりせば、永く難度の海に耽溺するのみであつた。天闇うして浪高き人生の海上に、永く浮沈せし私が、今日圖らずも御慈悲の船に救ひとられて、佛日照々の下、自然の徳風にまかせまるらせて、始めて意義ある生活を營ませて頂くことのまさ、寔に廣大なる願力廻向の御恩徳である。南無阿彌陀佛々。

六

るまでは無難なれども、一步進んで、天災も佛光の顯現となり、地變も佛恩の光澤と觀せねばならぬこととなれば、私には甚しき矛盾である。乃至饑饉戰亂が佛智の方便であり、拘摸泥棒が如來の手先きであると推論せねばならぬことになつては、この思想の歸趣する處は、甚だ恐れ多き次第で、佛法は滅法となり、解脱は下達となりて、地獄の方向に歩みつつあるものとなるはすまいか。或は私の持つて廻り過ぎた誤解であるかも知らないが、兎も角も私としては、今も尙ほ、永解し得ざる疑問である。

一實の本體より、佛と鬼が飛び出して、泣いて見せたり笑ふたりの感得は、鳥渡考へると、頓悟徹底的の趣を宿して見えるので、ある趣味の人には喜ばれさうな話ではあるが、あまりにも呆氣なき、茶番狂言じみた筋書のやうになつて來て、感興忽ち醒めて一向に難有く無い。

大我とか本體とか、道とか理とか云はれて居る、何等かのあるものより、それ自體が、出たり引込んだりして究極する處なき活動の現象が、この宇宙の實相であると云ふことは、聞かされて見れば、如何にもそれ

思想の過程を顧みるに、幾度か迷雲に蔽はれ、疑網に捉らへられて苦しんだことであるが、所詮それがみな、觸光の因縁になつて居ることは、今日洵に思ひ出多き嬉しい話である。

宇宙の本體を指して直ちに如來と觀することが、思想の究極ではあるまいと云ふ疑問が、知らず識らずの間常に思索の裏面に膠着して居つた。

私の冥想に浮ぶ究竟の絶對界は、如何にしても、宇宙の本體を離れて考ふることは出來なかつた。左らば、宇宙の本體を以て眞如一實法性法身の如來と觀じ、隨て天地の現象を指して、直に佛智の光耀と仰ぎ、人生の百般を捉へて、永へに恩寵の擁護と感ずることは、至極穩當なる見解として首肯せらるゝやうに思はるゝのであつたが、また退いて熟々之れを思ふに、其所に頗る妙な矛盾が生じて來るのである。宇宙の本體が慈悲の如來であり、宇宙の勢力が智慧の光明であるとすれば、現に今、窮乏不足を嘆ち、貪愛瞋恚に悩まされ、名聞榮達に焦れ煩惱憂苦に沈んで居る、この私の發生が、そもそも如來の惡戯ではあるまいか。星の輝きに佛の慈悲を喜び、花の薰りに如來の恩寵を感ず

に相違は無い。同じ島の土中より、里芋がころげ出たり、むぐらもちが飛び出すと云ふことは、全く妙な事實で、島の土も、人間が開化しないさきから、不思議なる離れわざをやつて居たものである。瓢箪から駒が出ると云ふ話は、今日では人を驚かさない、併し斯る研究の説明は、強ひて宗教を煩はざなくとも、進化論や科學の説明を聞いて、大略は領かれるやうな氣がする。宇宙を大觀して、こゝの呼吸調子を呑み込むことを以て、或は永遠の生命に觸れたとか、繋がつたとか心得へて喜んだり、佛と會見した積りになつて安心に腰を据ゑて居ることが、眞の安心解脫の味ひであつたら、その安心は案外に難作なき安心ではあるまい。極難信の法と示しつゝ、淨土の門に勧め玉ふ、諸佛如來の思召につき合して、ソリが合はなくなりはすまいか。純潔無垢のひめ鞠を打ちやつて置けば、何時かはなしに微を生じ、更に乾燥して固體となる、宇宙の進化、人生の成立を、鳥渡斯様に考へて見ると、向上修養とか開化進歩を圖ると云ふことは、更に一層の固體とすることか、又は、柔らかい原とのひめ鞠にしやうとすることか、鳥渡その方向色彩が私には鮮明でない。科

學者の努力を見ると、智識の火にかけて固くする方にあり、宗教家の希望を察すると、情意の水に浸してひめ糊に還元さす方にあるやうに思はれる。人間と云ふ者は、隨分と極端に馳せて際限のないものであるから、泣いて見せたり笑ふたり的の茶を濁して、調和を得たる思想となし、中道に立ち悟道に達したるものと心得へて、妙な處に腰をする事にもなり易い。固くする目的も有せず、柔くする方の身方でもなく、左りながら腰をするには腰落ち付かず、暫し思案の態度が、哲學者には多いかも知れない。其の外に日和見の姿で種々の遊戯に耽つて居るものは澤山あるやうに思はれる。

之れを要するに、固くしやうと努力するのは、理想を逐ふて進むのであり、柔らかくならんとして工風するのも、同じく理想を指して歸らんとするのである。何れも理想を逐ふて動くのであるが、その覚むる方向に、東西前後の差があるので、何時までたつても、一の焼點に歸着せしむることは絶望と思はねばならぬ。

進んで自己に、神通自在を體現せしめんとし、若くば、果して徹底的のものであるか否や、反省すべき價値はあるまいか。

斯く臆測を進めて行けば行く程、宇宙乃至人生は、初より無宗教で無明闇黒、爲體の解らない、膨大なる怪物に過ぎないと云ふ思想に歸趣せしめるるのである。「末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈んで、淨土の真證を貶し、定散の自心に迷うて、金剛の真信にくらし」との聖人の御文は、七百年後の今日、生れられたる私に對し、直きの御化導と味はせて戴くことである。

七

抑も極樂涅槃の淨土と云ひ、淨樂我常の法身と示さるるも、詮する所、「凡地にしては證られず、安養にいたりて證るべし」とあり、「釋迦無碍のみことにて、とくともつきじとのべたまふ」とのことなれば、凡具下根の私共が、思慮や言葉の及ぶべき筈では無い。経験を超えては考ふることも出來ず、相對を離れては想ふことも能はざる私共には、靈界外赫々佛日照々、洵にこれ絶対ではあるまいか、不可稱不可說不可思議ではある

はこの相對世界の上に、極樂淨土を建立實現せしめんとする努力は、百年の壽命は愚か、七度は萬度生れ更りても、吳下の阿蒙を偲ばしめ、手に提げて立つ鐵槌の働きは、千載空しく同じ土臺の地均らしに過ぎないことに想到せしめるべし。退いて、煩惱の障礙より解脱して、清淨無垢の自性に歸らんとする希望も、自己が容貌の陋醜を悔いて、鏡に向つて工風を凝らすと同様の趣を認める、打ち壊して改造するに非らずんば満足に目的は達せられぬ。是に於て、進んで騎虎の蠻勇を逞ふせんとすれば、却て社會乃至自己に龜裂を生じ、退いて失望の自然主義に墮落すれば、人生は益々闇黒に陥る、寧ろ半途に腰を下ろして、喫煙一服の休息は、至つて危險少なき態度なれども、可もなく不可もなき不透明の日暮しは、決して徹底したる内心の安住ではない。永く靜止すれば必ず何れにか動かんとする、至つて不安なる立場ではあるまいか。進むも退くも將だ止まるも、凡てこれ解脱安心の目標に背進したる道程ではあるまいか。科學の經驗や哲學の説明に依て、宇宙に光明を認め得たりと考へたり、修養向上の途を辿りて、人生が明るみになつたと思ふこともあるまい。

權假方便の假門に迷倒して、眞實正法の眞門に廻入するを得ず、自性唯心に膠着せしめられて、他力の淨信を獲得するに至り難く、粉黛臘脂の舊慣永へに薰習して、仰て廻向自然の靈光に浴することの得難き、嗚呼「難中之難無過此難」、微妙甚深なる哉佛言、廣大無邊なる哉佛智、唯信順し見敬し奉るべきのみ。斯うして、遠慮無き告白をさせて頂くも、所詮、私の信仰を増上せしめ玉はんが爲めなる、大悲廻向の大なる御恩徳であります。南無阿彌陀佛。

朝夕ノオ禮

佛ノ御慈悲サキイタ入ハ、思ヒダシタトキイツデモ、オ念佛ヲナヘテヨロコビマス。モノ上ナイガ慈悲ニアツカルノダカラフ、コノヤウナ有リガタメセス。
朝オキダトキモ一晉ニ佛前ニテ、御禮サシテカラ、父母ニ「ガハヤウ」チ云イ、夜ネルトキモ佛前テ、夜ノ御禮サシテカラヤスマス。御禮ノコトバハイツモ南無阿彌陀佛アリマス。
○佛サマノナイトヨロデハ、西ニムカヒテナガミマス。四ハホトケノオ國ノ方角アリマス。
○ヨシ子サンハ、學校ノ寄宿舎ニハイリマシタラ、オ佛サマガ無ツタノデサミシクテナリマセスカラ、木箱ノ申ニチイサナ佛サマヲツクリ、オ花ナゲテサガミマジタ。

「教行信證」信卷講話

二四

第九席 願成就釋

近角常觀

一 專念は即是れ一行

宗師云專念即是一行。云專心即是一心也。然者願成就一念即是專心。專心即是深心。深心即是深信。深信即是堅固深信。堅固深信即是決定心。決定心即是無上上心。無上上心即是真心。真心即是相續心。相續心即是淳心。淳心即是憶念。憶念即是真實一心。實真一心即是大慶喜心。大慶喜心即是真實信心。真實信心即是金剛心。金剛心即是願作佛心。

る。所謂古來「廣轉釋」と申し、「即是れ」の語を幾つも重ねて御喜びある處であります。而して斯く幾つもの言葉でお喜びの處なれば、以下直にその一々の御言葉につき、頂かせて貰はふと思ひます。

初に

『宗師の專念と云へるは、即是れ一行なり。專心と

云へるは即是れ一心なり』

宗師は善導大師であります。善導大師が專心專念の仰

せに就きては已に六席の處に於て

光明寺和尚は一心專念と云ひ、又專心專念と云へり。とのお言葉が仰せられてある。今はその御言葉を承け

て、大師が一心專念彌陀號と言はれた専念は、専ら念

佛ばかりといふことである。他の如何なるものも雜じ

らぬ、念佛ばかりといふこと故、「即ち是れ一行であ

る」、唯南無阿彌陀佛の一つだとの仰せであります。處

てこの念佛ばかりといふ味は、再々言ふ如く此方から

「南無阿彌陀佛の一である、餘へ心を向けるでない」
と、此方から佛に向ふことでは無くして、佛より私に
「もうこの親の手織り丈けである、外の物が間に合ふ
汝では無いぞ」と、親より手織りをこしらへ、與へて下

された處の御心である。こはもつと平たく言ふと、佛より私へ言うて下さるには「汝人生に於て種々の望み

も有らう。或は自分の境遇を斯うも爲し度い、あゝも

なり度い。又人からも斯う／＼仕て欲しいと、種々の

望みも出でてあらう。——即ちもつと上等の着物を欲

しいと思ふてあらう。けれども親の目より見る時は、

それは皆な迷ひである。何の役にもたゝぬ。汝如き亂

暴者は、忽ち破り、よごして仕まふにきまつてゐる。

故にその汝の爲めには、もうこの親の手織りばかりして

あるぞ。この手織り一枚は、その爲め親が長々の辛苦

苦勞でこさへ上げた着物故、何うか之ばかりは受けて

呉れ」と、斯く親より言うて下さる御心であります。

私は茲二三席はこの事ばかりを申して居る。今又之を

言ふは、既に皆さんが充分お聞き下された事とは思ひ

ますけれども、若し中に自分は頂いた積りでも、まだ

本當に頂けて無い方があつてはならぬ。故に人生、信

仰の問題に於て、若し何處か一點でも不安の處がある

方は、今この話で安心を得て頂き度いと思ふて申すの

である。折角二週日の會を開かして貰うても、唯それ

が「信卷」を講義した丈けに終つては何もならぬので

ある。何うか一應の講義と聞かれずに、飽く迄御一人々々に充分佛の御眞意を得て頂き度いと思ふのであります。實は昨夜も談話會後、遠方より御上京下された方と夜遅く迄話し、二時になる迄も皆さんが非常の熱心でお聞き下され、私も我を忘れて夜更くる迄御話を申したのである。而して皆さんが久しく聽かれた上にも猶ほ何處か不足を感じらるゝ様を目の當り見せて貰ひ、又飽く迄聽かんとなさるゝ皆様の御熱心に深く事の問題故、まだ充分の御安心がない方は勿論の事、御自身は左程に思うてお出でなくとも、折角御來聽下さいながら、本當の處を擡まず仕舞ひに御歸り下される方があつてはならぬ。幸にこの會期中に夫れ／＼氣づいて頂く處がなくては、何程人數多くお集り下されても、詮なき事と感ずる次第であります。

二 お助けが此方の積り

では何もならぬ

そこで今の一一行の味ひは、もつと人生的に言ひます

るゝ土井氏と申す方は、久しい間喜んでお出での方であつた。久しく喜んで居られたのであるが、先きごろ病氣に罹られて、彌々手術臺に上らなくてはならぬことになつて來た。上の時は極めて安心して上られたのであるが、下りたらサア恐ろしくて／＼仕やうがない。今迄お助け／＼と喜んで居られたは、實は自分ごしらへの、此方の積りに過ぎなかつたのである。故に彌々助からぬかも知れぬとなつたら、サア俄に恐しくて／＼仕方がない。東京に出て見えて、私の所にお出で下されたのであります。之が何かといふに、即ち今迄久しく聞いて居られたのであるけれども、それが唯何時死んでもお助けといふ自分で決定の安心に過ぎなかつたからである。世間でも「あなたは親切な方と思ふてます」といふは、眞に先方の親切の受けられた者の言でない。故にさう思つてゐるものゝ、彌々自分の身に火が着いて來ると、果して何うかとなつて來る。即ち平日無事の時は死は假定で言うて居つてよかつたのであるけれども、彌々と行き詰つたら忽ちグラ／＼と今迄の安心が碎けて仕舞うたのである。御出で下されて言ふには「自分はもう何程お助けと思うても、安心が

と、私共人生を日常何う考へて居るかといひますに、「自分はこれ程善い事を仕て居る、之れ程人にも親切を盡くして居る、人も少し善く仕て呉れさうなものだ」或は「何うかも少し善い具合に成りさうなものだ、思ふやうならぬので困る」と始終取つたり措いたり、何時迄も問題が切れるといふことがなくて、苦に苦を重ねて居るのが私共の現状であります。私共が始終他に對しても、「濟む濟まぬ」の考の止まらぬのは皆より何處迄も善くしてやり遂げんならぬ、飽く迄奮闘して成し遂げんならぬ」と、總て何處迄も我と我手で解消して行かうといふ腹で居る。爲めに何時迄も問題が解けるといふ時がなくて銘々苦を重ねて居るのであります。處で今それに対する佛の仰せは何うかといふに、——茲で皆んなが佛の仰せを聞かうと仕無いで直ぐ「佛は斯う／＼言うて下さるのだ」と、自分がしらへに佛の御言葉を直ぐ持つて来て、蓋をするといふ風になり易い故、茲をよく氣を着けなくては分らぬ。先達でもお出下されたのであります、衆議院に出て居ら

なられぬやうになつて來た」といふ御尋ねであつたのであります。してその御様子が一通りでない。私は申したのである。「今迄あなたはお助け／＼と喜んで居られたのであるけれども、親は屹度自分を思つて、呉れるに違ひ無いと、自分で然う思つて安心して居るのと、此方は何も思つても居やせぬに、親の方は思ひ懸けなく此方を心配して下されてあつたのと何うであるか。貴方は今迄のは、親は思つて、下さると、然う貴方の方で思つておいでになつたのである。けれども今眞實の親の慈悲は、此方に於てさう思ふことは無い。現に此方は斯く「親は思つて、下さるのか」位に、平氣に横着な頂きやうをして居る。その様を御覽になる佛は「あう浮か／＼した聞きやうをして居るが」と、即ち今貴方が死ぬと思ふと恐ろしいと言はるゝそこである。その便りなき哀はれなる貴方の様が可哀相て捨てられるが、親の慈悲は茲一所なのである。今迄貴方は、下關迄行くと門司に渡る船があると思うて安心し居られたのである。そこ迄ゆくと大願の船があると思つて居られたのであるが、そこ迄行つても船が無つた爲め、貴方は困つておいでになるのである。處が何

ぞ知らぬ、その何處迄ゆきても——船の無い貴方であること

を佛かねて知召し

生死の苦海ほとりなし、

ひさしくしづめるわれらをば、

彌陀弘誓の船のみぞ、

のせてかならず渡しける。

汝死ぬと思へば先きは眞暗で分らぬであらう。死後何うなることか、それは貴方にも私にも分らぬ。が茲に佛より直き——の仰せには、——即ち釋尊のお説き下された處は佛直き——の仰せである。その仰せにはその苦の海に漂うて居る汝が眞に可哀相で見殺しにされぬのである、その汝故我の方から待ち受けるとある廣大の仰せなのである。夫れを今迄貴方は此の向ふ様の御聲の方は聞かうと仕ないで、自分の方より勝手に「佛は斯う——」とひとりよがりて喜んで居られたのであるが、今彌々自分の行く手が眞暗となれば、さういふ浮か——してゐる奴故哀はれみ見捨てないとある、此の御言葉を頂く外無いてはいか」と、斯やうに私は申したのである。その言下に今の方は、ほろ——涙を流して御安心下されたのであります。

にこの御老人は御安心をなされたのであります。それ故先達ての談話會にも、あすこ迄苦心の道行きについては話されたのであるけれども、彌々安心の處になつたら、何處で安心を得られたか、殆ど分らぬ程にあつた。即ち信心は向ふ様の仰せを頂く處で、初めて得させて貰はれる。それを皆んなが肝腎の仰せの方は聞かうと仕ないで、「あ——頂て居る、斯う思ふ」と、これではいつ迄たつても頂かれる筈が無い。之では何處迄いつても、結局自分の積りといふ丈けに過ぎぬのである。處が實際は斯ういふ狀態で居て、自分では頂けた積りで居る人が少くないのである。故にさういふ方は今この席で、佛の廣大なるおこゝろは、此方が現に然ういふ頂いた根性で居る。それを佛より御覽じて「その出来た根性で居るのがあぶなくて——仕やうが無いのである。その心得た根性で居るのが可哀相で捨て置けぬのである」とある廣大の御まことなることに氣を附けて、今迄の方角を一轉し、眞の佛のお心をよく頂いて欲しいのであります。

そこで今言ふ如くに、南無阿彌陀佛一行といふとは此方から「御念佛ばかり」ときることで無い。佛より

三 大悲の仰せを聞け

二八

又こは初席來いふ大原老人にしても同じである。京都で私の宿に訪ねて來られて、「何うしても未來の安心が出来ぬて困る」といふお尋ねであつた。私は申したのである。「私だとて矢張り同じである。死んだ先きが何うなるか、それは私にも分らぬ。鐵橋で枕木の間から海を眺めるのと同じ恐しさであるけれども、その中に唯一つ、私の襟上を擡かんて墮さんとある。慈悲の御一言である。この便りなき身を、斯う迄仰しやつて下さるお慈悲の御一言と承はれば、

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられまゐらずべしと、よき人のおほせをかうふりて信する外に別の仔細なきなり。

今迄貴方は自分の坐つて居る床は、確かにとと思うて居られたのである。けれども一旦その床が眼に見えて壊はれて來たら仕やうがない、大地に墮り着いて居てもする——墮ちて行くに困つて居られるのである。然るに今然ういふ貴方を、疾うから墮さんと言うて居て下さるお慈悲の仰せではないか」と、かう申しした一言

「汝、財産、智識、家族、健康、種々當てにならざる物を當てにし、濟む濟まぬと暮して居るのであるが、そんなものは一つとして當てになることで無い。その頼りのなき仕て見やうのない汝故、私は疾くより捨てぬと言ひて居るのである。故に汝の爲めにはもうこの吾が親心はかしてある故、何うかこれ一つは受け呉れ」とある親様よりの御仰せなのである。私共一人々々に親様は斯く直き——言うて下さるのであります。そこで私共、この仰せであることに一念氣づかして貰ふと、茲で初めて「親鸞に於きては唯念佛して彌陀に助けられまゐらずべしと、よき人の仰せをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり。」である。即ちひと度びこのお心であることを知らして貰うて見ると、「成る程何れの道も絶え果てたる自分の身の上であつたのである。爾るこれをお見捨てない思し立ちとは如何なるお慈悲の御不思議ぞ」と、最早や斯く頂く喜びの外に何物もなくなつて來る。即ち斯く頂いた信心の有様が、次の専心である。一心である。故に次には大師が知らせています。

四 一念即は専心等

さて茲でお言葉の調子が變つて来て、次には
『然れば願成就の一念は即は専心なり』。

願成就文の乃至一念は、之を時剋の上より言ふと、既に五席で頂いた如く、信樂開發の時剋の極端を現はす一念であるけれども、之は時剋ばかりに限るのではない。又この一念は、廣大の法門ことを頂いて、滿心慈悲ばかりと仕て貰うた味ひである。こは既に六席の處の御文にも

一念とは言ふは信心一心無きが故に一念と曰ふ。又是を一心と名く。

と仰せられあつて、一念は即ち専ら慈悲ばかり、佛ばかりと仕て貰うた處である。故に「一念は即ち専心なり」であります。次に

『専心は即は深心なり』。

は、その佛ばかり、慈悲ばかりといふ味ひは、軽い「ばかり」の味ひでは無い。深く佛の眞實を頂いて『歎異抄』の二章で言へば、

そのゆへは、自餘の行をはげて佛になるべかりける

る。即ち深く信ずる所の心であるとてある。處でその深く信するといふは何うかといふに、茲に少しくお話し仕なくてはならぬ。

五 佛の眞實と私の不實

抑々私共は凡夫の淺い心として、何んなことあつても他が信ぜらるゝなどいふことはないのです。設へば友人を如何なることあつても疑はぬと措かうと覺悟して居ても、其の中「一念若しや欺されて居はせぬか」といふ心が起つて來ると、もう何うして見ても信じられぬやうになつて來る。こは私共が日常つねに繰返して居る問題であります。て人間は自分の心を立場としては、何んな事あつても他を信するなどいふことは出來ぬ。處が反対に友人の方が、飽く迄自分によくして呉れる。自分の方は飽く迄不實薄情で向つて居るに係はらず、友人の方は飽く迄の不實を承知の上で益々親切にして呉れる、となつて來ると茲に初めて如何な不實の私も、其の友人の變らぬ眞實の爲めに降参して「あゝよくも」こんな自分にそんなに迄善くして呉れる」と、先方の親切が受けられるとなつて來るの

である。てこは常にいふ私の不實と先方の眞實との力較べである。そして向ふの眞實が、終に私の不實に勝ちをほせるか、私の不實が何時迄も先方の眞實を彈ね反して仕舞ふかの問題なのです。然るに片方の親切なる御方にこの事を話すと、皆様は「イヤ自分の不實と佛の眞實と、相撲とつて居るとは思はぬ」と仰しやるけれども、私共の平生はこの佛の眞實と私の不實との相撲なのである。そして折角の佛の眞實を、端から彈ね反して居る様なのです。然るに片方の親切なる御方は、私が斯く不實で刃向ふに係はらず、益々親切を以て反抗して行くのである。茲で人間の親切であると如何な實意の人でも一度ならず二度ならず彈ね反されると、最早や二の矢が繼がれなくなる。處が今この親切なる方の方は、さういふ人の親切を飽く迄無にして見ると、最早や二の矢が繼がれなくなる。處が今この、飽く迄廣大の御眞實である爲に、益々同情の涙を以て向うて下さるとなる。處が此方は猶ほ／＼不實の心を以て天に反抗するけれども、片方が飽く迄此方の不實に上越す廣大の眞實である爲めに、終に此方が如

身が、念佛をもうして地獄にもおちてさふらはゞこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

斯く明に我が身の惡しさが分つた上での佛ばかりの味ひである。即ち「何れの行も及ばぬ者故見捨てられぬ、仕やうの無い者故救ふ」とある廣大の御まことであれば、此御まことが聞えて見れば、如何にも自分は外に道の有りやうはなかつたのである。成る程「我が身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁有ること無し。」——斯く彌陀地獄以外に行き場無き自分であるとが、彌陀に分つて、成る程斯の如き自分に對しお見捨て無き仰せの難有やと其者が此御親切一つに腹ふくらせて貰うた佛ばかりの味ひである。故に専心は即は深心なのであります。次に

『深心は即は深信なり』

こは據所といふと六かしくなるけれども、善導大師の深心釋中の御文に

深心と言ふは、即は深信の心なり。

といふお言葉があつて、之から仰せられたも示してあ

何にも不思議の御親切であることに気がついて、「成る程今迄一應の親切かなんぞのやうに思うて居つたが、然う迄思召して下さる廣大の御眞實であつたのであるか、實に恐入りました。長々御親切に逆つてばかり居て、實に何とも申譯け無い」と、初めて此方が頭が下るのは、即ち向ふ様の御眞實の爲にどうぞ此方の不實が打負けて、夫れ程迄の御眞實に對し此方の長の不實が申譯け無いとなるからである。で信仰には、「この此方の不實と佛の眞實と相撲取り、此方が恐入つて謝り果てた思ひがなくてはならぬのであります。處がかく言うても「夫れは佛ぢやもの、さうある筈だ」と取られては、之れ又何にもならぬのである。それは頗るお慈悲を敬うた言葉に似て、其の實佛をひと呑みにして仕舞うて居るのである。これでは甚だ申譯けないのであります。そこでこの間の味ひは、皆様が友人間の事柄にして考へて見らるゝと直ぐ分る。處が昨夜も思ひたのであります。ですが、皆様に茲の處を私が力を入れてお話して居ると、皆様もよく御了解下されたやうに見える。だからも分り下されたものと思うて居ると、實は筋丈けの御了解に終つて居る方が多いのである。筋は何程分つても

か知れぬけれども、向ふの出やう次第で狂つて来る親切なら、本當の親切で無いのである。或はそれにしても、「自分の方が先きぢやない、此方はする氣で居るのだけれども、向が不實で來るから出來ぬのだ」と斯う仰しやるか知らぬけれども、さういふ親切なら、それは自分さへすれば、先方は受けて呉れると、初めから豫期して仕て居る親切である。或はも一つ言ふと、此方からさへすれば、向ふは屹度受けて呉れると、恰も金で物を買ふ氣でやつて居る親切である。これでは述も親切といふことは出來ぬのであります。處で之が理窟のやうで、決して理窟でない。故にこのお慈悲を頂くには、自分の方に一分でも善い事が出来るといふ氣があつては、述もお慈悲の程は頂けぬのである。私は能く人の信仰を可かぬといふことを云ふ。甚しきに至りては、十年廿年聽いて居らるゝ人の信仰を否定する。これが皆な、自分の持ち物が可かぬとななければ、本當のお慈悲の程が頂けぬからであります。甚だ皮肉な事を申すやうであるけれども、隨分皆様の中には「自分の信仰はまだ本物で無い。けれども多年聞いたのであるから、少くも八分通りはよいであらう。何處か物足

眞に斯く御見捨てなく仰しやつて下さるお慈悲が分つたのでなければ何にもならぬのであります。

六 私の経験

そこで、くどいやうなれども、私の経験を言ひますと、私は初めは人に飽く迄親切が出来る、立派に善くやり通すことが出来ると思うて居つたのである。でそれで遣つとる中に、此方が何程善く仕ていつても、先方が自分的心事をよく了解して呉れぬといふ事柄が持上つて来たのである。私は之に行き當つたのである。「自分はこれ程善く仕て居るに、先方は却つて惡意にとり、受けた呉れぬ」となつて来ると、耻しながらその人を悪しく思ひ、不足に思ふ心が起つて来る。するとその心の爲に今迄私の善くして居たと思ふ親切が、最早や續けられなくなつて、何程力んでももういかぬやうになつてしまつたのである。茲は御同やう、人に親切なぞ到底出來ぬと言ひつゝも、頗る氣のつき難い處なのであります。皆様は「自分は親切に仕て居るのだけれども、夫れを向ふが受けて呉れぬから、續けられ無い」と、これを向ふの精にして、何氣なく通つて仕舞はれる

らぬ處はあるけれども、それはあと一二分の處だと、斯ういふ思ひをして居る方が、少くなからうと思ふのである。先夜も武田さんは御自分の喜びになつた處を話されて、「最後にも一つ感激さへあれば充分だと長々思ひたが、其感激が如何にしても得ることが出来なかつた。處が何ぞ知らんその最後の感激一つが如何にしても得られぬ者であることを哀はれみて、お見捨てのない御親切であると聞かされて、初めて廣大のお心を知らして貰ふことが出来た」と仰しやつた。すれば百中、唯一つでも「も少し不充分」と思ふ處があつたらもうその信仰は駄目なのである。九十九迄はよくつても、あととの一つが怪しかつたらもう可かぬ。之は九十九迄親鸞聖人の眞筆に達はぬと思うても、あと一分が「併し何うか」と思はれたら、もうその書き物は取り所が無い。「あと一分でまがいの無い眞筆になるがな」と、いふ如き眞筆のあることは無いのである。若し一分でも疑はしい點があつたら、あと九十九分が全部似せ物となつて仕舞ふのであります。

又前年或方は、「自分は或人を深く信じて居るとして、九十九迄その人を堅く信じて居る。けれども最後

に「併し何うかな」といふ思ひが起つて來ると、もうその念が消されぬので困る」といふことを仰しやつた。私は「それでは御自身は九十九迄堅く信じて居る積りで居られても、あとの一歩が駄目になれば、全部が駄目になるでは無いか」といふことを申上げた。「あの男はあんなに言つてゐけれども、若しや自分を欺いて居るので無いかといふ念が、最後に唯一つ出て來ると、それ迄の九十九信じたといふのが一遍に引くりかへつて、皆な嘘になつて來る。それは初めの九十九信じたといふのが、向ふの眞實が分つて信じたのではなくて、自分の自力で信じやうとして信じたのであるからである。即ち之で見ても人間は到底他を信するなどいふ事が出来る者で無い事が分る」といふことを申上げた事があります。すると其方の仰しやつたには、「成る程自分は今隨分堅く人を信ずることが出来る積りで居なけれども、一分不足が出て來ると、始めの九十九信じたと思つて居るのが皆な嘘になつて來る。成る程之だから人間は駄目なのだ、世の中は虚偽なのである。だから君の言はれる信仰は、茲でもう間違はぬのは慈悲ばかりと、斯く信するのか」と、斯う仰しやつた。この

嘘であつたとなつて見ると、もう仕やうが無い。何うか早く本當の處を聽かして欲しい」と、何人にあつても最早や之ばかりになつて來る。處で今斯く一點の取り所もなくなつた私の爲に、疾くより私のその不眞實を哀はれみ、その爲に飽く迄見捨てざる思ひをもて、待ち受けて居て下されたが佛の御眞實なのであります。一體茲で皆様が、直ぐお助けを持つて來られるのが悪いのである。お助けを持つて來られるから、何だか悪いなりて極樂に參らして貰ふことのやうになつて來る。然うでは無い。佛のお慈悲は、「その悪いのが可哀相で見て居られぬのである。」私が疑へば疑ふ程「その疑ひの性分が哀はれて益々捨て置けぬ」と、茲で私のその悪しさ、不實の爲めに、飽く迄／＼遣る瀬なく仰しやつて下さる御眞實である。即ち斯く飽く迄／＼仰しやつて下さる御親切である爲に、終に一點のまことに私——炭の塊の私であるけれども、向ふが斯く飽く迄／＼燃やさな置かぬとの火の心で向うて下さる御眞實である爲に、「あゝよくも／＼、かほど迄の炭の私を、お見捨てのない仰せの難有や」と、茲で初めて頂かして貰はれるとなる。故に佛の仰せは、茲

最後の慈悲ばかりは間違はぬといふのも、矢張り自分の心で然う思ふのであるから、是又駄目である。すると最早や自分の方には頼む可き物が何等無くなつて来る。無いから即ち親の御心配が有難いのである。皆なが物を持つて居るから、折角の親の御心が頂かれぬのであります。

七 私の不實を捨てぬ眞實

さてすると最後に何處で頂くのかといふに、然ういふ、嘘偽りばかしの私である。すること思ふこと一つとして虛偽ならざるはなかつたのである。て茲で「成る程仕て見やうなき自分であつた」と、動もすれば之に腰掛けて仕舞ふ人がある故、茲を一言して置く必要がある。成る程今迄、自分は嘘、偽りばかしてあつた」と、茲でこれ丈けのことが分つたのが、信仰では無いのである。それは唯今迄知ら無いて居た、自分の惡しさに漸く氣が就いて來たといふ迄の事に過ぎぬのである。故に茲で本當に之に氣が就いて來た人であると、最早やこんな處に落ついて腰掛けては居られぬ。今迄思つて居つた信仰も慈悲も、乃至親切も友人も、皆めに持出して申したのであります。

私がまことならざればならざる丈け、彌々哀はれ／＼とある、茲のところを皆さん能く御了解を願へたでありませうか。故にまだ自分に一分でも眞實が存すると思ふてる間は、このお慈悲は頂かれたので無いのである。去りながらこは決して、自分にまこと無い者と思ひなさいと申すのでは無いのである。けれどもこの親の御まことが頂けると、何人も自分のまこと無つたことが分つて來ることを申したのである。大分六かしくなつたが、以上は昨夜々深迄茲の處を御話した爲めに持出して申したのであります。

そこで今言ふ如く、假令九分迄眞筆であつても、あと一分が怪しかつたら應擧の繪でも捨てなくてはならぬ。が、斯く一分一厘眞實が無いと成り果てた者を、之を見捨てぬとある思ひがけない御眞實を頂くと、もう之に嘘もまこともあること無いのである。之を聞かさる」と、「斯く一分一厘まことの無い者を、斯程迄の遣る瀬の無い思召か、難有や」と何人につても、餘りに／＼お慈悲の忝けなさに、頭が下りて有難い。そこで之がお助けなのである。それを皆様は、「悪いけれどもお助け」と、その間にまだ物を残して置いて、悪いな

捨てなき思召一つに腹ふくれて、浮ばせて貰へるとなるのであります。

八 堅固信心等

さてこの位にして次に移り、

『深信は即是れ堅固深信なり。』

その頂いた信心は堅固深信であるといふは、之も此方で思ふ堅固深信では無い。向ふ様の廣大の御まことの故に、それが終に此方に届いて下されたのだから堅固深信なのである。私の方で堅固になるのではなくて、向ふ様の廣大の御心であるから堅固なのである。死ぬと思ふと私共恐しいばかりであるも、それを墮さぬ慈悲の御眞實と頂くと、之れ程の堅固は無いのであります。次に

『堅固深信は即是れ決定心なり』

決定とは、このお見捨てのなき慈悲により、往生一定御助け治定と、夜が明け決定された味ひである。全體私共平日言ひつけて居る言葉故左程に驚かぬのであるけれども、決定とはひどい言葉である。決定してもう間違はぬといふ言葉である。何う決定かといふに、佛

の遣る瀬の無い眞實と、私の不實と角力とり、向ふ様の御見捨てない御眞實に氣がついた爲め、如何にしぶとい私も敗かされて、その敗かされた時が決定である。一度び遣る瀬の無い御眞實に攫まれた上は、もう間違はふにも間違はぬ。故に蓮如上人は「たのむ一念の時往生は一定、御助けは治定」と、この決定味を始終お知らせ下さるのであります。次ぎには

『決定心は即是れ無上上心なり』

こは『和讃』にも

無上上は真解脱、 真解脱は如來なり、

真解脱にいたりてぞ、 無愛無疑とはあらはる。

とありて、此上ない上にも猶ほ上の無い、如來の廣大の御まことを頂きて決定したる信心なれば、即ち是れ無上上心である。

『無上上心は即ち是れ眞心なり』

此の上の無い上にも上の無い廣大な信心は、何處から來るとなれば、即ち佛の眞實心より来る。故に無上上心は即ち是れ眞心である。

『眞心は即ち是れ眞心なり』

こは淳心、一心、相續心の三信のことは、覺智道綽二

淳心は、一分一厘も雜りけなき純一無雜の心である。私共の方は雜りけばかしの者であるに、何うして雜りけなく佛を喜ぶ事が出来るかといふに、佛の仰せが餘

師が言ひ置かれてある。それをこゝに繰反されたのであります。眞心はまこと故、即ち續くところの心である。續くとは、べた一面に在るのなら、相續といふことは言はぬ。相續とは切れては續き／＼するから相續である。念珠は個々別々の珠が糸でつながれてあるの故、即ち物ありて續いて居るのである。私共如來の御まことを頂いた心も、煩惱の水火の爲め始終と、切れ／＼にはなるけれども、根が遣る瀬なき慈悲に基いた信心なれば、慈悲が變はらぬ爲め信心も相續するのであります。故に『帖外和讃』のお示には

金剛堅固の信心は、 佛の相續よりおこる。

他力の方便なくしては、 いかでか決定心をえん。私共の方は亂れ通してあるも、佛よりその私を忘れ給はず、飽く迄／＼お見限りなき慈悲である爲めに、私の方は相續出来る者では無けれども、その佛の相續より金剛堅固の信心も起るとの仰せであります。次に『相續心は即ち是れ淳心なり』

三八

りに。
尊いからである。私共我慢勝他の塊りの人間
が、何うして「孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸する
が如く、尊の弟に仕へること出来るか」といふて、私

『意念は即是れ眞實の一心なり』
憶念の心つねにして、佛恩報するもひありとも仰せられてあります。次に

一憶念は即是れ眞實の一心なり

共の方に仕へる力がありて仕へらるゝので無い。主君の仁慈の恩召の餘りに、廣大である事が、一度び心に分つて來る處から、もう今迄のやうに忠義を盡くすの盡さぬのと、言ふて居られぬ。恐れ入りてづまらぬ身體なれども、一命を投げ出して仕へさして貰ふといふ、純一無難の心も起つて來るのであります。

九
憶
念

次
12

「浮城物語」

「和讃」には
に支へられ、忘れ勝ちであるけれども、その者の爲に
飽く迄支へず、廣大のお心を運んで下さる不思議の恩
召であることを知らして貰ふて見ると、もう此の御才
ことばかりは、難有くて忘れやうにも忘れられぬ。

弘明集卷之三

すればこの心は、佛の御まことの私の識心に徹入して下された信心であれば、如何な事ありても、もう變ら

には
『願作佛心は即是れ度衆生心なり

「願作佛心は即是れ度衆生心なり」

この金剛心なるお言葉は、何氣なく言うて居るなれども、容易からぬお言葉で、本講本後の處には眞に知ぬ彌勒大士は等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會の曉無上覺位を極むべし。念佛の衆生は横超の金剛心を窮るが故に、臨終一念の夕大般涅槃を超證す。

「金剛心は弔星れ頑乍弗心な

は、願作佛心は普通には、上求菩

は願作佛心は普通には上求菩提下化衆生の菩提心を起して、佛を作り度へと願ひ求むる心である。併し

が起して、僕は作り度いと願ひ求める心である。併し今茲の頃半佛心は、或そ又拂て手の度に二頃から

今茲の願作佛心は、我々が佛に作り度いと願ひ求むる

心では無い。佛の方より設ひ我佛を得たらんにと、私

の爲に廣大の願作佛心を起して下された。その佛の願

作佛心が私の心に届いて下された有様が、一念開發の

信心なのである。故に一念開發の信心には、自らその廣大のお心が顯はれて、「淨土に參らして費ひ度い」との念も起つて来る。即ち私共の頂いた信心が、直ぐ佛

より御廻向の廣大の願作佛心であるのであります。次には

『願作佛心は即是れ度衆生心なり』

之も佛が私共を救ひ遂げば正覺を取らぬと、廣大の誓ひをお建て下された。その佛の度衆生心が私の心に届いて下されての度衆生心である。信心頂くと私共の方に一切衆生を濟度する度衆生心が起つて来るといふことは無いのであります。總てこの願作佛心度衆生心は、私共が頂く一念にその廣大のお心を佛より賜はあるの故、私共の一念の信心にその廣大のお心が籠つてあるとの仰せなのであります。次には

『度衆生心は即是れ衆生を攝取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり。』

さて斯く頂かして貰ふた一念の信心は、佛が一切衆生を攝取して往生を遂げしめて下さる、廣大なる度衆生心の籠つてある信心であるが、之も信心が頂けると我々にその心が起つて來ると取つては可かぬ。今いふ如く願作佛心度衆生心は、私共が頂かして貰うた信心を直ぐ押へての仰せであることを忘れてならぬのであります。次に

之も佛が私共を救ひ遂げずば正覺を取らぬと、廣大の誓ひをお建て下された。その佛の度衆生心が私の心に届いて下されての度衆生心である。信心頂くと私共の方に一切衆生を濟度する度衆生心が起つて来るといふことでは無いのであります。總てこの願作佛心度衆生心は、私共が頂く一念にその廣大のお心を佛より賜はあるの故、私共の一念の信心にその廣大のお心が籠つてあるとの仰せなのであります。次には

「度衆生心は即是れ衆生を攝取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり。」

さて斯く頂かして貰ふた一念の信心は、佛が一切衆生を攝取して往生を遂げしめて下さる、廣大なる度衆生心の籠つてある信心であるが、之も信心が頂けると我々にその心が起つて來ると取つては可かぬ。今いふ如く願作佛心度衆生心は、私共が頂かして貰うた信心を直ぐ押へての仰せであることを忘れてならぬのであります。次に

『是の心は即是れ大菩提心なり』

初席來言ふ如く法然聖人は、彌陀の本願には大菩提心は無いとも示し下された。成程自力の菩提心は無けれども、その廣大のお心を頂くと、それが即ち廣大の願作佛心度衆生心である。即ち淨土の大菩提心であることは、再々申した通りであります。次に

『是の心は即是れ大慈悲心なり』

この淨土の大菩提心は即ち大慈悲心であるとは、全體大慈大悲なる御言葉は、私共凡夫の小善根に就ては言はぬ。大慈大悲は阿彌陀佛のお慈悲が大慈大悲なのである。佛が私共を救うて下さる思召が大慈大悲なのであります。けれども勿體なきことながら、その佛の大慈大悲が私共の心に届いて下さるの故、私共の頂く一念の信心には、その廣大のお心が具はりてある。即ち私共が信心を頂くと、一切衆生を哀れみ助ける大慈悲心が現はれて来るといふではなくして、その頂いた信心が直ぐに廣大の大慈大悲心であるとの仰せなのであります。こは『歎異鈔』の御教化にも、

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。……淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心を

故に、私共凡夫所生の自力の心では無い。廣大なる一如の佛境界より私共迷ひの凡夫の有様を御覽下さると、如何にもその迷ひの有様が哀はれてならぬ處から、廣大なる智慧光明を放ちて現はれて下されたが廣大の阿彌陀佛にてましますのである。故に其の智慧光明より遣瀬なく思召し下さる大慈大悲心なるが故に、「是の心即是れ無量光明慧に由つて生ずるが故に、願海平等なるが故に發心等し、發心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ佛道の正因なるが故に。」

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。……淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心を

普く一切を攝せんが爲めに。云々。(選擇集)

即ち佛の本願は、老少善惡を簡ばず、如何なる者にも平等に哀はれみ加へんとの廣大の本願にてましますが故に、本願が平等故に發心も亦等しいとてある。發心等しいとは、佛が私共を助くる／＼との佛の發菩提心が等しいとてあります。而てその發菩提心が等しい故に、佛の菩提の道も等しいのである。菩提の道が等しい故に、それより來る大慈大悲心も亦平等である。もと／＼平等の願海より來る大慈大悲心であるからてあります。而れが頂けた處が信心である故に、「大慈悲は是れ佛道

もておもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。……しかれば念佛まうすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にてはさふらふべき。云々。

「念佛申のみぞ末通りたる大慈悲心にては候べき」な樂に參らせて貰つて佛となり、思ふが如く衆生を助け遂ることの出来る大慈大悲心ではあるが、その然う出来る力は、廣大の大慈大悲を頂かせて貰つた一念の信力に、はや佛より賜はつて居るのである。故に「念佛申すのみぞ末通りたる大慈悲心にては候べき」——頂く所の一念の信心が直ぐ廣大の大慈大悲心だと仰せてあります。

一〇 大慈悲は是れ佛道の正因

次に

『是の心即是れ無量光明慧に由つて生ずるが故に、願海平等なるが故に發心等し、發心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ佛道の正因なるが故に。』

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。……淨土の慈悲といふは、阿彌陀佛の大慈大悲心なるが

の正因なるが故に。——今私共の斯く罪深きを飽く迄哀はれみ思召す大慈大悲心が佛道の正因だとてあります。こは『歎異鈔』第三章の御示しには

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり。云々。何も世間じ通りのお慈悲なら、大慈大悲心などとは言はぬ。大慈大悲心は、私共何れの行にても生死を離るゝことある可らざる者、一切諸佛の手では到底助らぬ者を助けやうとの廣大の思召にてましますが故に、大慈悲心と言ふ。故に其大慈大悲の御本意は「惡人成佛の爲めなれば、他力を頼みたてまつる惡人もつとも往生の正因なり。」——道の絶え果てた惡人程、よけ哀はれて捨てられぬとあるが、佛の大慈大悲の御本意なのである。故に私共この大悲のお心を聞かして貰ふた時は「實に自分程の惡人はなかつた、何處に一個所取り處なき、實に自分は罪惡の塊、惱みの塊」とのことが分つて来る。而してその仕やうなき自分を何處迄も哀はれ／＼とある廣大の御恵みは、實に石の私、鐵の私を

ば、飽く迄も見捨てさせられざる廣大の思召である。
 「あゝ斯程迄の難有い思召とは、誠に佛は恵みの塊、
 お慈悲の塊」と、斯く飽く迄／＼お見捨てなき思召で
 ある爲に、如何な鐵、石塊の私も、眞底からその思ひ
 かけざるお慈悲の爲に恐入つて、融かされずには居ら
 れなくなる。これが惡人成佛のお慈悲の御本意が私の
 心に届いて下さるからであります。で私共唯空に「斯
 る淺間しき者をお助け／＼」と言ふてゐるでは、何時
 迄たつても融けぬ。それは上面からかぶせて居るので
 あるからである。テンブラであるからである。それで
 は何の役にも立たぬ。私共の惡しきを見捨てず、飽く迄
 石塊土塊の私の心底迄、融かさな措かぬとの廣大のお
 慈悲心に實際出遇はせて貰ふからこそ、御同やう如き
 悪人も、茲に始めてその思召一つに腹ふくれて、満足
 させて貰ふとなるのである。故に御同やう如き悪人な
 けれども、この惡人の心中に入り満ちて下さる大慈悲心
 こそ、實に佛道の正因であるとの仰せではあるのであ
 ります。

それで私が平日皆さんにお話仕て居るに、私では言
 へる丈け言うて居るのであるけれども、私の言ふ何れ

○も素直に人の言ふことが聞けぬのが私の石、鐵の性分
 のである。けれどもその石、鐵を飽く迄融かさな置か
 ぬとの廣大のお心に面の當り臨まれる爲め、石、鐵の
 私が、如何にも／＼思召の添けなさに恐入りて「あゝ
 有難や」と、石、鐵の私が心底迄廣大の思召に融けてし
 まふのである。大慈大悲は是れ一つが有難いのであり
 ます。南無阿彌陀佛。

一一 是心作佛、是心是佛

次には

論註曰。願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也。

提心也。

今言ふ如く石、鐵の淺間しき私なれども、その石、鐵
 を飽く迄融かさな措かぬとの、大慈大悲の火のお心で
 お向ひ下さる御親切である爲めに、終に如何な石、鐵
 の私も降参して、「あゝ有難い」と、その一念に石、鐵
 の私が心底迄火とされて仕舞ふ。その火となるは、火と
 する迄見捨てぬとの佛の大慈大悲の火のお心が、此方
 の心に届いて下さる爲なれば、その頂いた大慈大悲心

が即ち無上菩提心なのである。即ち淨土の大菩提心と
 なるのであります。次に

又云。是心作佛者、言心能作佛也。是心
 是佛者、心外無佛也。譬如火從木出、火
 不得離木也。以不離木故、則能燒木。木
 爲火燒木即爲火也。

真宗に於てもこゝ迄言はれてある。處が茲が從來間違
 ひ易くて困る處なのであります。先づ
 「是心作佛とは、言ふこゝろは、心能く作佛するな
 り。」

真宗では如何なる事ありても、自分の心が佛になると
 いふ法は無い。佛の方よりの願作佛心で、佛の方より飽
 く迄私を佛にせにやならぬとの廣大の思召が、私の心
 に届いて下さる爲め、畏多き煩惱具足の身なれども、心
 能く作佛されるとなるのである。故に佛の方よりの遣
 る瀬無き願作佛心の爲めに、思ひがけなき願作佛心を
 私の心に起させて頂くとなるのであります。然うてな
 くては、元來佛が有難いなどの念の起つて來べき私で

次に

無い。爾るにその奴が不思議なる哉、思ひかけなき慈悲に出遇はして貰ふた爲め、「廣大の思召の有難や」と、鐵の私が忽ち火と作されて仕舞ふのである。即ち真宗に於ては、此方の方から佛と作るのでではなくて、佛の方より佛と作されるのであります。又

『是心是佛とは、心の外に佛無まさすとなり。』

是の心が是れ佛であるなどとは、真宗にあつてはどんなことありても言へぬ。去りながらこの仕て見やうなき心を、飽く迄お見捨て無き廣大の思召が、私の心に移つて下さるのに、此の石塊、土塊の心が、中一杯に佛のお心が入り満ちて下され、滿心お慈悲ならざる隅は無いやうにされて仕まふのである。處が茲の味ひが、直ぐ「自分は、もう信仰を得た、悟りを開いた」と、恰も自分の心がはや佛となつたかの如く誤解され易くてならぬのである。真宗に於ては、どんな事ありても自分の心が直ぐ廣大な恵みの佛であるなど、は言へぬのであります。

一一 木即ち火と爲るが如し

てあります。そこで斯く何處迄も煩惱の木である處の私を、その木を飽く迄焼いてやり度いとの思召である處が實に有難いのである。蓮如上人『御一代聞書』には衆生をしつらひたまふ。しつらふといふは、衆生のこゝろをそのまゝをきて、よきこゝろを御くはへさふらひて、よくめされなし候。衆生のこゝろをみなとりかへて、佛智ばかりにて、別に御したて候ことにてはなくさふらぶ。即ち茲なのであります。茲を又聖人の『雲巒讚』には、本願圓頓一乘は、煩惱菩提無二と、すみやかにとくさとらしむ。私共悪い處の有る者を、捨てぬとのことが、逆惡攝すと信知するとのことである。この悪い所のある者を捨てぬとの仰せである事を頂かねばならぬのであります。それを皆さんは「悪いけれども極樂に参らせて貰へる」と、悪いとこをお見捨ての無い慈悲の方は抜きにして、直ぐ結果の方を先き見られるから可かぬ。

昨日も或方は「先生お慈悲を頂いて極樂に参らせて貰ひます」と言はれる。佛のお慈悲は何も私共が極樂に参らせて貰ふ事で無い。斯く私の悪しきを何處迄もお

木は木である。私共は何處迄も凡夫の木なのであります。然るに「火木より出で」は、木が擦すると火が出る。けれども今私共凡夫の木を焼き盡さんとのお慈悲の火は何處から来るか。私共が木なる處より、その木である事が哀はれて見て居られぬ處から現はれ下されたりお慈悲の火であれば、即ち私共が木である處から現はれ下されしも慈悲の火である。私共の木を離れて、お慈悲の火はあること無いのであります。而て斯く本來木を焼かんとのお慈悲の火であれば、一度び木に火が燃えつけば、如何なることありとももう離れぬ。即ち終に火木を焼いて木が全然火と作られて仕舞ふ。すると其火となつた木を置いて外に何處に火があるのですか。斯く飽く迄／＼お見捨て無きお慈悲の火の爲めに、煩惱の薪がまる／＼火とされて仕舞ふが、是心作佛、是心是佛の味ひであるとのお知らせ

見捨ての無いお慈悲のために、

わが計らひにて、地獄へもおちずして、極樂にまいるべき身なるがゆへなり。(蓮如上人御文)

地獄に行く奴を、思ひ懸け無いお慈悲の思召で、極樂に参らせて下さるのである。それを悪うても参らせて下さると言うて居るのでは、初めから慈悲が決りきつた事になつて、何處が思ひかけない思召であるのか、薩張り分らぬ。然うでは無く、この地獄ならでは行き場無い身を、飽く迄哀はれ／＼との思召であることを思ひがけなく知らされるから、「あゝよくも／＼」と、その思召一つに満腹して、安心させて貰ふことが出来るのである。この遣る瀬無い思召を頂いたのでなくして、唯「悪うてもお助け」と押へつけて居るのでは、何程有難い／＼と言うて居ても、心の底に何處か濟まぬ處が抜けぬのであります。

一二 斯る者をお助け」とは

お慈悲をすかした言葉

喻へば私共、善くない例なれども、人から金を借りたとします。すると之を返へさせなならぬ。處がいつ幾日

返済の期限が来ても返すことが出来ぬ。處が先方は頗る氣の優しい人で、承知ならぬ處なれども「向ふも何か事情があるのだらう」と、待つて呉れたとする。又約束の時が來た。けれども返すことが出来ぬ。今度は定めて腹立てられるだらうと思ふて行くと、思ひ懸けなく先方は、「君相變らず出來ぬのだらう」と、恰も出来ぬを豫期して居たといふ如き風である。其中又約束の時が來た。返すことが出来ぬ。「如何に何でも今度こそはもう言ひ譯けの言葉が無い。何程辛抱強き人でも、この度びこそは愛相を盡かさるゝだらう。」思つてゆくと、意外にも先方は又「出來ぬだらうと思うて居た。君の苦しいのは能く分つて居るから、決して苦しいのに無理して貰ふとは思はぬ。自分の方は何時でもよいから餘り心配せぬやうにやり給へ。」思ひがけ無く斯う言はれて見ると、今迄唯濟まぬ／＼と自分の義理立てばかり言うて居て、先方の夫れ程迄の親切であることを無にして居たことが何とも濟まなんだ。「あゝこれ程に迄不義理、濟まぬことを重ねて居るに、それに飽く迄呆れて下さらず、斯程迄に言うて下さるとはよくも／＼」と、終に此方の義理立の方が敗けて、茲で始めて先方を撥ね付し、すかして居つたのである。「今日迄仕たことを思うたこと、一つとして佛の恩召を無に仕て居ぬものとてはなかつた。あゝ斯く迄ゐるそかに仕て居た者を、佛は私のその無にする性分が可哀相で造る瀬無きお心を運んで下されたのであつたか、有難や」と、その御眞實を知られた爲め、最う頭が上ら無い。「あゝ長い間よくも／＼お待ち下されました」と、今迄の總てを皆な謝り果て、その恩召一つに腹ふくらして貰つたが、『逆悪攝すと信知して』なのあります。で始めからこのやうな者をお助けと言ふて居るでは、てんから慈悲を甘く見、馬鹿に仕て掛つて居るのである。處が斯くいふと大變六かしい事に取られるかも知れぬも、六かしい事でない。一分一厘私の方にせぬならぬ事としては無いのである。皆様が六かしく取られるは、自分の方より「何かせぬならぬ」と取られるからである。その「せぬならぬ」やうに有つたり、「する事入らぬ」やうにあつたりする、いつ角出来る氣でそんな事思つて居る、その汝の持前の性分が哀はれて親の方は離れて去るわけにゆかぬとの仰せなのである。この恩召である事を頂かして貰ふ一つなのであります。

一四　お慈悲との相撲に

勝つて居る

そこで此の間からいふ例の相撲の喻へである。あれを言うと、皆様が「成程相撲を取つて居るな」と、取つて居る方の事は考へらるゝけれども、自分が佛を捩じ伏せ、勝つて居るのであるとに氣をつけられぬから可かぬ。凡そ世の中に、「佛など有るもので無い」と思つて居る人、「佛の存在が何うかなど思つて居る人、この種の人は初めからお慈悲を馬鹿にし、輕蔑し、頭から取り合はずに、遁げて負かして居る人なのである。處が佛の方よりは、「汝が輕蔑して居ることも、疑つて居ることも、ちゃんと知つて居る。知つたから其さまじい性分が哀はれて捨てて置けぬのである」と、最後にこの思ひがけない仰せであることを聞かさるゝ爲め、如何に馬鹿にして居た奴ももう頭が上らない。恐りて「有難うムいます」と、綺麗に投げを喰はせらるゝのであります。處が相撲にも種々の手があつて、又中にはすねて相撲を取る奴も有る。「自分の様な悪い事では、とても助けて貰はれぬ」これは拗て負かしてや

の御親切の程が頂かれるとなるのであります。處が「イヤ返へせぬのは悪いけれども、向ふは善い人だから、頼みに行つたら屹度待つて呉れるだらう」。「向ふは辛抱強い人だから、濟まぬけれども呆れは仕て呉れぬだらう。」斯う言うて居るのでは、本當に先方の親切に頭が下つたのでは無い。實は頭から先方を一呑みにし、馬鹿に仕てしまつて居るのである。處が御同やう斯く此方からは、飽く迄馬鹿にし、呑み込み、すかし、撥ねつけ、突き離し、色々にやるのであるけれども、佛の方ではもと／＼その性分が哀はれとお起し下された本願であれば、如何なる事あつても呆れ給はず、怒り給はぬ。益々その根性が哀はれ／＼との仰せてある事が、何かの機會に一度び分つて見ると、「成る程今迄は皆な仇に受け、すかして居つたのであつた。」〔和讃〕に

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしどき、

大菩提心おこせども、自力かなはて流轉せり。

御同やう今日迄「あゝか斯うか」と、様々に心を持振つた事は實に切り無しである。「けれども夫れが皆な、自分の事は自分で始末しきる根性から、總て折角の恩召

らうといふ、甚だ男らしからぬ相撲である。此種の人は自分でも佛と張り合つて、相撲とつてゐるなど、毫も思つて居ぬ。けれど何處迄も人の言ふことには耳を貸さぬ。しぶとい根性に至つては同じである。この根性が慈悲の上にも、人生の上にも到る處に顯はれて來て、「佛は助けて下さるといふけれども、こんなとては仕やうが無からう。」「こんな事では世の中は困つたものぢや。」「このやうな悪い事では人が呆れて仕舞ふだらう。」甚だ我が身をへり下つた言ひ分で、まことに立派のやうであるが、矢張り佛の哀れみを無視し、つきやつて居るのである。聖覺法印が『唯信鈔』の御教化には

よの人づねにいはく、「佛の願を信ぜざるにはあらずれども、わが身のほどをはからふに、罪障のつもれることはおほく、善心のおこることはすくなし。ころつねに散亂して、一心をうることかたし。身とこしなへに懈怠にして精進なることなし。佛の願ふかしといふとも、いかでかこの身をむかへたまはんと。」

即向ふは親切に仕て下さるけれども、自分の方が悪く

有り切りの力を絞つて向つて下されてあるに、「如何にも私は悪うまい」と、初めから佛をあまして、空を打たせる奴である。他力を聞き慣れてる人間には、之が多くてどもならぬのであります。即ち初めから「悪い者をお助け」と、初めから佛の御心配を引きはづして遁げて仕舞ふもの故、折角の五劫永劫の御苦勞も、佛の獨り踊りになつて仕舞ふてある。而も「悪い者をお助け」と、一向我が身の惡しさに就いては平氣で居るのは、極端に言うと、全く佛の本願とは離れ、却つて本願を口實に、勝手に悪いとをして居るものであります。之には御同やう、ちと驚きを立てなくては可かぬのである。言つて居る私からが第一さうなのであるからである。うつかりすると、私共悪いのは「是も御存じあれも御見通し」と、佛の方ではその私の惡しさを助けやらうとお向ひ下されてあるのに、私の方はすかし、いなし遁げてしまふといふ之になつてある。處が佛の方は、そのすかし遁ける奴故、もう相手にして下さらぬかといふに、否、そのすかし、いなし何處迄もまつもの故、遁るを追はへ、すかすを取りつき、どうど

て仕やうが無いと、慈悲の深さに對して、飽く迄吾が身の惡しさを以て張合つて行かうといふ機歎きであります。處が此方は之でやつて居るのに、佛の方からは、……此おもひまことにかしこきににたり。憍慢をおこさず高貴のこころなし。しかはあれども佛の不思議力をうたがふとがあり。佛いかばかりのちからましますとしりてか、罪惡の身なればすぐはそれがたしとおもふべき。

「一體そのやうに自分が悪い——と歎いて居るのは、親はその汝の惡しさを知らずに言うて居ると思ふのであるか。その汝が惡しさの爲め、數かなならぬ處が如何にも可哀想で、親は放つて置けぬから出て來たのではないか。その親は設へ如何程汝に罪が有らうが、その罪は初めから承知の上だと言うて居るでは無いか。一體佛に何れ程の覺悟がありて、捨てぬとは言うて居るのだと思うて居る」と、斯く飽く迄——言うて下される爲めに、終に如何な拗ね者も恐入りて、「有難や——」と頂かして貰はれるとなるのである。殊に最後に申しつ度いのは、初めから佛と立合はずに、頭からすかして仕舞ふ一類の人である。即ち「佛は助けてやる」と、

最後に私を取り押へて下さる。押へられて見ると、「斯程迄の恩召でありたか有難や」と、茲で始めて頂かるとなるのであります。で私は相撲の事は一向知らぬも、私共が慈悲に逆ひ、反抗して居る手に斯く色々ある。要するに素直に頂くといふ事は、私共に於て決して無いのである。素直に頂いたと思うて居るのは、實は皆な遁げ、すかして居る人なのである。故にその長々忍向ひ抵抗する私が、初めて廣大の御心に氣がつき謝り果てた一念は「本願圓頓一乗は、逆惡攝すと信知して」——何人にあつても此の外無いのであります。

一五 如實修行相應等

次には

光明云。是心作佛。是心是佛。是心外無_ミ異佛。

これは只今『論註』の御文で申し通りであるから、略することとして、次に

故知。一心是名如實修行相應。是正義。是正行。是正解。是正業。是正

智。三心即一心。一心即金剛真心之義答。
竟可知。止觀一云。菩提者天竺語。此稱
道。質多者天竺音。此方云心。心者即虛

行し相應する」である。その佛の遺る瀬無きも心が心中に徹到して思召通りに頂いたのが即ち相應したのであります。故にその御まことの貴はれた一念なれば、即ち「一心是を如實修行相應と名く。」

心は即ち昨年度『三信釋』以來も示し下さる處の論
知也。已上

「實相身なり爲物身なり」とのことは、如來は私共の哀
歎化は、如實修行は『本卷』初めの處の御文に
てあります。其の一心は「如實修行相應」であるとの御
云何か如實修行と名義不相應と爲す。謂く、如來は
是れ實相身なり、是れ爲物身なりといふことを知ら
ざるなり。

下され得つた。その大信海の信樂は、即ち淨土の大菩提心である。即ち横超の金剛真心であると、どうど今年度今日迄の處に於て茲迄も示し下されたのである。即ち三心即一心の義は前年度の處に於て、一心即金剛真心の義は今年度の處に於て「答へ竟んぬ」との御言葉である。即ち以上説く處に於て、其の義は明に得よとのお知らせであります。さてこの次に於て

「止觀の一に云く、菩提は天竺の語、此には道と稱す。質多は天竺の音、此の方には心と云ふ。心は即ち慮知なり。」

上に再々繰反された處の菩提心なる語の意義を梵語の上からお説き下されて、菩提とは天竺の言葉であつて、この國の言葉に直ほせば道といふ意である。即ち佛道の義である。又心の字は彼の國の言葉では質多と言ひて慮知の義である云々。この慮知の意味に就きては古來隨分六つかしき理窟も言はれてあるも、要が無い。唯私共に於ては疑ひなく慮りなく、佛の廣大なむ心を次頂いた信心であることを頂けばよいのであります。以上今席は大分長くなり、殊は昨夜深更迄激しく御話した感じを申さうとした爲め、却つて前後錯雜致しむ聞

諸君へお詫
長らくの休刊につき讀者

お又際今編けも實れ改こ 特しせのずやせ月
願今間後者ね紙跡と變の猶別たら事るら、しの誌
ひ回題はの點上にのを方ほの「れに處、御幸、當て種た休
い定に及力に於、施に如つてありく許年を申
た假置はのつて三二致合に如何一にて居ます數なくまし
しに密す足りて是の三三まし仕事、會仕者
改にならばはのつておた事、御館もが、段頼は
變明かざるは「表と方」費も寛富者、御館もが、段頼は
加取そが少は「一ふ積成容事」この何事まし照會愛
かれが少は「一ふ積成容事」この何事まし照會愛
へのつ致かれ、「おつ積成容事」この何事まし照會愛
たて點すら難成話はりに下も下もの前近さ方うが有があ
事項に處ゆい力も前近さ方うが有あたことばは、何
かけも故遣爲のあ々「いれ拂に有あたことばは、何
もる充、感めあつか木たん中力ふあつた譯では無
・や分餘を、るたな號と共に、あつすか譯では無
合う意儀持譯證か携らりに、おちが得外園が申中々
せにか無つ者仰らりに形、御度ゆ次居君てあ梗の今後園
御度ゆ次居君てあ梗の今後園てひ思外園が申中々
了い、第りにあ利するが、御度ゆ次居君てあ梗の今後園
と今て充るが、御度ゆ次居君てあ梗の今後園
承、も一にはじみ分味が、御度ゆ次居君てあ梗の今後園
下も思歩あたるは「つ何前仕の微徴をさねに縦くけ致
ふ人り多くて生まることまで如力ますされに縦くけ致
生まることまで如力ますされに縦くけ致
をす實がは項に異きを「れて制輯存るさケ

ご取扱い難くがてた事だらうと思ひます。要は必しも皆様が多く聞いて下さるのが目的で無い。斯く毎日一席を重ねて聞いて下さる爲に、今迄不審の方も其不審が晴れ、又無つた人は新に不審が起つて、總ての方々が手を揃へて御慈悲に入つて下さる事、唯これのみを念願する次第であります。已上。(第三回夏李求道會第五日第一席)

だくしく言ふにも當らぬ。要するに上來お知らせ下さる、佛の廣大な御眞實。これ一つが眞の正しい教である、眞の正しい義である、之を外にして眞の正しい教は無いとの御示であります。さて斯く頂き来る時は、『三心即ち一心なり、一心即金剛真心の義答へ竟んぬ。知る可し。』

大分問題が前に達上つて來た。即ち『信卷』の上下に涉りてのち言葉である。即ち前年度の講本に於て、至心信樂欲生の三心は、結局信樂の一心であること迄お示

行し相應する」である。その佛の遺る灑無き心が心中に徹到して思召通りに頂いたのが即ち相應したのであります。故にその御まことの貰はれた一念なれば、即ち「一心是を如實修行相應と名く。」

『即是れ正教なり、是れ正義なり、是れ正行なり、是れ正解なり、是れ正業なり、是れ正智なり。』

親鸞聖人は斯く何處へても、曼鸞、道綽、善導の諸師方の言はれたお言葉を、其の儘持つて来てお喜びになる。茲は善導大師の『散善義』に六正徳と言つて、佛の仰せに六つの正しきお徳があることを言はれてある。それを直ぐ茲にも示し下されたのであります。人々く、

切迫せる現下の思想問題

五二

○全體日本の思想、若くは教育なるものが律法主義已外に出づるとが出来ぬやうになつて居る。佛は慈悲の塊であると言へば、火は熱き物也といふこと、同じ様に思うて居るのである。そこで分つて居るけれども喜べぬといふ様な問が出るのである。分つて居るといふは佛の説明と考へて居るのである。その様な説明をして居るのでではない。眞の火を身體に推し附けてゐるのである。故に内的實驗といふのである。説明と思ふゆゑに從順なる青年は分つたといふが、中心を言へば信ぜられぬといふ。如來とか淨土とか言へば、直に偶像や花散る極樂といふ形や所を考へて、存在と否とを論議しようと思ふのである。勿論律法主義を嫌惡するの餘り、信條を拒み、又信ぜられぬものを信ぜられぬと断言するは勿論なれど、内的實驗に向て理論理窟を以て

つといふ藝術をして平氣で居らるゝならばよい、此素封家は家道に於ては厳格であるが、他の方面には社會公益の爲に事實多大の貢献を厭はぬのである。若し家道の嚴正なる意義より推せば、公益が果して公益であるか、慈善が果して慈善であるかをも疑ふと述懐せられた。兎にも角にも一本調子の質問は、世の二重生活者流を慚死せしむるものがある。

○例へば此に甲乙二人ありて、其壽命が百歳であると假定せんか、甲若し一年多く存命せば乙一年短くなる道理である。甲長命せんとせば乙の壽を短くせねばならぬといふ理窟になる。歐羅巴の戰も利殖の道も同様ではないか。獨ても英でも彼程强大であるのに、他の小國をいじめるにも當らぬではないか。鉅萬の富を有しながら他の小者を寛大にしてもよいぢやないかといふは側面よりの批評の言である。果して何人か自分の命を伸めて人に與ふることが出来るか。夫が出來ねば同様の理窟である。

○或素封家が尋ねられたことがある。我家は利殖を以て家道とする次第である。其家道と佛道とは矛盾はないかと。一見奇問の如しと雖、寧ろ奇問ではない。頗る尤なる尋である。家道は家道、佛道は佛道と方附け置くことが出来れば洵に結構である。眞諦門は眞諦門俗諦門は俗諦門と、而も矛盾せる兩刀使をして平氣で居らるゝならば結構である。人を撲つては撫て、撫ては撲

○こゝに至りて私は、嘗て死刑囚人が自分の辯護人を頼む代金のために、娘を賣らんと試みたものがあつたことを思出す。其娘は他の男と逃げて仕舞ふた。親も親なら、子も子である。而して此囚人の犯罪の證據には息子が證言してあつた。而も此證言は偽であつた。私はどうかして救はんと勉めたれども、司法官が取上げなんだ爲に死刑に處せられた。兩三年前明らかなる反證が上りたれども如何ともすべからざること、なつた。近時自己の犯罪の證跡を晦ますために、残酷に女子供を廃殺するものが出来る様になつた。是畢竟自分が遁れたいばかりに怨も憎もない人を害する様になるのである。司法官が人を死刑にさへすれば罪惡は止るやうに思うて居るが、一層殺されるなら幾人も殺すも同じといふ様な残酷なる犯罪を誘致する様になる。大に注意せねばならぬ。

信 仰 と 實 人 生

五四

近 角 常 觀

次記の一文は、今夏高松市の講習會に於て、「信仰問題の徹底」と題して、一週日に亘りて講述せるものゝ第一日及第七日分である。岡山市の山陽新報社に執筆なる方が居られて、毎日同紙上に連載して下された。多少前文と重複する處があるが兎に角そのまま玆に轉載することにいたしました。

律法主義と自然主義

律法主義と云へば逆に讀んで法律と云ふ様なもので、斯うも爲にやならぬア、も爲にやならぬと自力修行に没頭する向きである。道徳では斯う爲にやならぬア、爲にやならぬ、マダ／＼道徳では心の中まで徹りかねる、更らに宗教に入つて心の中で佛を頼まにやならぬ、信ぜにやならぬと云ふ様な事を思ふのも、共に之れ律法主義と云ふものである。人道の上から斯うせにやならぬ、道徳の上から斯うせにやならぬと云ふ事

主義である。信者の人でも私はモウ信仰が出來て居ると云うて居る人があるが、解つて居ると云うて、さて本當に安心ができてるか如何かと考へる。ソレで安心ができてるなら考へる必要は無いのである。斯の如くア、も仕や斯うも仕やう、ア、も爲にやならぬ、斯うも爲にやならぬと云ふ様な事を思ふのも、共に突當つて、そのでき難い事を知つたなら律法主義も駄目ではないか。

皆さんは自分は善い事を仕て居ると思ふて見なさい。

俺は善い事を仕て居るのに他人が認めてくれぬとの愚痴が呟かれる。自分が好い事を仕て居ると思うが爲に、他人を悪いものとして衝突ができる。自分が善い／＼と計り唱へて居るから治まらぬのである。果して自分が善いと思はれる様なものなら、親鸞聖人は罪惡の人間と云はれる筈はない。アレは宗教ぢやから、道徳の方ではソレで好いのだと思ふは誤つて居る。

或金満家の主人が漸次信仰を追うて、或時私に來てくれと照會が有つた。私は嚴重に注文して、世間體の招聘ならば御免である、眞實信仰問題を聽かうと云ふな

が實際開う仕て居らぬものである。更に其の爲にやらぬと云うて仕た事が果して善いか何うか。心の中で佛を信ぜにやならぬと云ふは自力であるが、眞宗信者の人の多くが、自力と云へば蛇蝎の如く忌み嫌つて居るにも拘らず、其心の中で仍り右の如く自力をして居るではないか。信者は信者らしい行ひを爲にやならぬとか、善は善である、大なり小なり、其の善を爲れば好いじや無いかとか、近角が來た、講話を聴いて信ぜにやならぬとか、世間の風儀が好くないから少と道徳を鼓吹して之を矯正せにやならぬとか、云ふ様な事も皆之れ律法主義である。自分は雑誌を發行して居るが、モット遅れぬ様に爲にやならぬとか思ふのも律法

ら行くと云うて遣つた事があつたが、眞實聽きたいとのことで私は行つた。其主人が云はれるには、家道と宗教とがどうも衝突する、宗教では人を救へ人に施與せよ、人を憐れめなどと云ふが、私の家では人に金を貸して利息を取つて居る、人に施與するとは反対である。宗教の方と家道の方と、何うも衝突する様に思ふが何うかと云ふので有つた。然るに又之を聞いて居た信者が、すなどりも好いと云ふのであるから、金を貸して利息を取つて居やうと、別に支障は無い筈ぢやと云うたが、皆共に解釋が間違つて居る。又其家の番頭が私に云ふには、何うも自分共が貸金を取立てるのに當つて、甚だ忍びない事がある。此方は別に利息を貰はなくとも、生活に支障を見ぬが、利息を拂ふ先方は、その利息を取立てらるゝ爲に、非常な苦痛を感じるのであつて、何うもそれが見て居られませんと。故に私は其人に云うた。元來お前さんが取立ると云ふ金は、御主人の金であつて、お前さんの金で無いから开う思ふので有らうが、御主人にしては自分の物であるから、却々そんな事を思うては居られぬ筈である。假令ば今お前さんと私が同じやうに百歳まで生きる身體とし

て、モシお前さんが一年長く生きやうとすれば、私の生命が一年縮まるものと假定して御覽。我が生命が縮まつても、人の生命を延ばして上げやうと云ふ様な心になれるか何うか。實際問題に突當つた所で、人間の心が開個までに融通がつくか何うか。其金がお前さんの物で無いから、さういふ同情も起らうが、其金の持主たる御主人としては、さうはできないと思ふ。東京邊で罪も恨も無いものを五人六人殺して逃げて行く曲者が有るものも、自己の身を逃れやうとする爲である。却々自己を捨て、迄他人に善ができるものでない。

二

然るに又他力の信者の多くは曰ふ。我々は善くせうと思つてもできぬものである、悪い事が止まぬものである。ソレで信仰ができて居らうか。自分は逆も善い事はできぬ、悪い事が止まぬと云うて、平氣で居るものがある。之れが自然主義である。悪い事をした其儘をお助けと云ふて安心して居るのは、其の惡を自ら許して居ると云ふものである。私方へ来る感心な人があつた。其人は貿易に從事して居る人で、之れもお慈悲ア

は何等意義あるもので無い。而して此閻此海を救はるゝものが如來なのである。

人間は争ひの心が止まぬものである。彼は悪い彼は無理ぢやと、五分の一の争ひをする心が止まぬ。其の心は悪いと知りつゝも止まぬ。其止まぬ心は悪いが、その悪い止まぬ心が可愛相ぢやと云ふのが如來のお慈悲なのである。ソレ程に五分々々の争ひの止まぬ苦しい淺ましい心を察せられて、お助け下さるのが佛の眞實なんである。之は卑近な譬であるが、人に借金をする。借金すれば返さねばならぬと同様に、我々は罪を滅ぼさねばならぬ、惡を消さねばならぬ。借金は返さねばならぬと云ふ事は之れ律法主義と云ふものである。然るにまた借金を返さねばならぬが返すに金が無い。金が無いから返せぬ、其の中に利息が積る、益々返し難くなる、愈々返せぬ。何うしても返せねば仕方が無いぢや無いから濟まして居る、之れが自然主義と云ふものである。又信仰に心掛る人は曰ふ。假令へ返さないても好いと云ふ人ありとも、返さねばならぬが、さて返すに返せぬから仕方が無い、返さいでも好いと云ふのだから、返さいても好いでは無いかと。概ね真宗の

普通信者はソレである。返せぬから返さいでも好い、返されりや返せと取つて居るが、开個が間違つて居る。乃て、逆も返されない其金を返さうと苦勞する、其心が不憫である、其の能ないのが氣の毒であるから、ヨコに捨へた此金を遣へ、返すが至當ぢやが逆も返せないのを見抜いた私は、可愛相ぢや氣の毒ぢやから、茲に造つてある金を持つて行け……と云はれた時の心持は如何て有らうか。爲ない、できないものを、できるゝと方んで居る様な浅ましい我等……盡未來永劫の間借金を返す事のできぬ此浅ましい罪惡深重の凡夫を救はんとの本願である。喧嘩する心を憐れんで、手向いて我を叩くも蹴るも構はぬが、その叩いたり蹴つたりする心が、いかにも不憫であると、今日三毒五欲の種を争ふて居る我々の心を憐れむ無量の慈悲を得して、其根の絶ゆる時、煩惱の花が咲かうとモウ根の縁が切れて居る。然るに修行信者は心を躬ら洗はうとする。此汚れた心を躬ら洗うて、眞に直さうとするのが眞ぢやと思ひ、一方は又此汚れた心其儘が眞心ぢやと思うて居るが、兩者ながら未だ真心では無い。即ち此眞ならざる心を憐れんで下さる佛の真心を信す

る心が真心である。『嘆異抄』に、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします、しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきが故に、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまだぐる程の悪なきが故に……とある。實に我々の心は炭團なり炭なりである。之に佛の真心の火を移して鐵をも鎔かす力が出来ると云ふもので有ります。

信仰より来る人生觀

皆さんはモウ信仰問題の徹底して下された事と考へる。乃て之より信仰問題の歸結と共に、信仰より来る人生觀に就てお話しをする事に致します。要するに先達て以來も話を致した處は、此人生は一も思ふ様にならず、人生は闇黒である、律法主義でも、自然主義でも行けない、進むも退くも儘にならぬもの、信仰の得られぬのも人生の一つの突當りである。开ういふ致方の無い人生を憫れんで下さつて、何處へ迄も遺瀬なく思召し下さると云ふ事は先達て來申した通りである。

信心は求めて得るのぢや無い、人生の遺瀬ない處を何處々々まで不憫と思ふが如來の心、如來の眞實なりと聞けば宜いのである。私の思ふ通りに出來ない處を憫んで下さるので、私の思ふ通りにして下さるのではない。

吾々が洪水に會ふて難義して居るを聞召された天皇陛下は、怎生も不憫なものよ、と早速侍従職を差遣はされて、汝等の難義を何處までも不憫と思ふぞ可愛く思ふぞ、ドンナ跋ても盲でも見捨てはせぬぞ、食物を與へるぞよ、衣服も着せて遣るぞよと仰下された時、その御言葉計りぢやない、その大御心の御眞實を戴かねばならぬではないか。然るに其の大御心の御眞實を戴かずに、唯だ思ふ様にして下されとは何事ぢや。放蕩息子が可愛相ぢや不憫なものぢやと憫れんて呉れる親の心にあまへて、不憫と思ふなら金くれ……と手を突出すやうでは不可ん。ソンナ手はビシャソリと撥いて遣るくらゐるものぢや。如來の眞實は……金くれたら好いと突出した手を撥いて置いて、ソシテその息子の心を憫れみ、ソンナ淺間しい心の者を何處までも見捨てずには、遺瀬なく思召すのである。私の知つて居る某家の

人生は何とも致方がない、皆さん一人々々考へて見て御覽。自分は何不足なしとせらるゝ人がコヽに在るか何うか。人望もあり財産もあり學問もあり、一見何不足のないやうに、他も思ひ自分も許して居ながら、さて思ふやうに許すやうにならぬが人生である。昨夜も或人から問はれたが、先生の曰ふ様に佛様が判らぬ……と。私の曰ふ事を聞いて、佛様を見やうとして居るのが第一間違ひである。如來は我能く汝を護らんと仰せられてある、此能くと云ふ字に對し親鸞聖人は「對不堪也」「對疑心之人也」と仰せられてある。堪へざるに對するのである、及ばざるに對するのである、疑ふ心の人に対するのである、迷ふ心の人に対するのである。即ちその不堪……疑心……を何處へまでも助け丁せんとてある。いかない……と謂ふて居つても、何うか信仰を得やうとするのは自力である。いかない……といふその苦みを不憫と思うて下さる眞實が他力で、その他力の眞實を戴くのが信仰である。いかない者は何處までもいかないのぢや。百姓が役所へ行て、何うが斯して下されと腰を屈め頭をさげて、いかないと云ふものを拗く頼んで居てもいかないものは不可のである。

息子が他處で不義理な借金をして居つた事が親父さんの耳に入つた時、親父さんは息子を呼んで、貴様は何故ソンナ借金をするか、此度だけは拂つて遣る。今後は決してソンナ處へ足踏してはならぬぞ……と叱りつけた上件の金を渡して、此度は借金だけを拂つてやる、早く持つて行け、旅費は遣らぬぞ、先方へは八里的道程、宜しく徒步いて行くが好い……と厳しく戒めた。息子は恐れ入つて直に身支度して出立した。後で親父さんは母親に對つて、アノ子に小遣ひを與つたか汽車賃を渡したかと訊いた。イエ何も遣りません、貴夫が汽車賃も遣らぬと仰て居られましたから……馬鹿な、乃公がア、云うて居てもお前が陰で遣るだらうと思うて居たのぢや。汽車賃も無して何て福島三界まで行けるか、早く番頭に持たして跡を追はして遣れ……と歩み行く後から呼止めて、貴郎は此暑さの折に徒步で福島までは御難儀だらうと、お母さまから汽賃と小遣錢を托かつて参りました……と手渡した時、その息子はモウ辿も汽車には乗れぬ、歩いて八里の道を行かねばならぬとと思うて居た、折からの母の慈悲を聞い

て、ワーッと泣き伏したと云ふ。ソコである。其の剝離の心持は何うか。此の不孝の私を左程までに思召下さるかと、親の眞實を戴いた時の心持は何うか。眞實とは、偽りならざるを真と云ひ、空虚を充たすを實と云ふ。偽らず而して空しさを満腹させるの眞實である。

二

爾るに天災に苦んで居るものが、陛下の救ひの聲を聞き、大御心の御眞實を其儘戴けば好いのに、ア、ではいかぬ、コウではならぬと、要らぬ氣配りをして見たり、下さるのぢやから下さるものを見つて置けばよいではないかと云ふ側と、下さると云ふてもサウは行かぬ、下さるともまた此方は出来るだけ善いやうにせにやならぬでは無いかと云う考への人もある。高松の信者の中には此種の人が多くはないか。我々の難義をみそなはせ玉みて侍従職を御差向け下さるのに、せめては及ぶ限り立派にして御歓迎もし、御待遇もせにやらぬなどと、要らぬ氣配りをするは間違ひて、陛下におかせられては、汝等が立派にして迎へるには及ばぬぞよ、又馳走などを心配するには及ばぬぞよ、ソンナ事

のできる筈でない事を知つてこそ、不憫と思うて使を遣はした事である。衣物なり食物なりを持たせて遣つたは汝等が一物も一食も儘ならぬと云ふ事を見抜いて遣はした譯である。ソレが汝等の自由になる事ならば、侍従職をして草鞋がけて態々差向けはせぬぞとの御眞實を、如何にも戴く事の能ぬと云ふは、南無阿彌陀佛の因を建立し玉へる、如來の救ひの眞實を了知する事ができぬと云ふ者である。然るに又一方では貴つて置け、下さるのだから幾許でも貴つて置けと云ふ様な事ではならぬ。斯く迄御眞實の思召なる彼の因を建立し玉へる御心を戴かねばならないか。私の様な者に有難い事を仰つて下さつても、私は私として何とか爲にやならぬと云うて居るならば、ソレが邪定聚の方で自力根性が残つて居つて信仰には入れぬ。又一方の構はんと云ふ方……貴つて置けの方は不定聚であつて是亦信仰に入れぬのである。全く明信佛智となつて來ねばならぬ。乃て

人生………信仰、信仰………人生
となつて、人生の有ゆる苦しみが信仰に救はれて、其信仰から光ある人生、意義ある人生となるのである。

吾々の闇黒なる人生が、如來の眞實を戴き信仰に入り、信仰より溢れ出て光明ある人生となるのである。そこで信仰から来て御恩報酬の生活となり、義務ぢやの義理ぢやの思はずして、此の罪の重量、借金の重量の爲に何事をしても面白くなかつたが、此の重量を見捨てぬ眞實の爲めに満足して愉快に否、その眞實で充實せじめられ、満腹せしめられる爲に、地獄におちても後悔せぬとなるのである。之が親鸞聖人の、……たとへ法然上人にすかされたてまつりて念佛して地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候……の仰せなのである。斯うなつては如何なる迫害、災難に遭ふたとて、首刎ねられたとて更に頓着ないと云ふ境界となる。然るに徹底せぬから中途で迷ふて居る。どん底まで達せねば浮き上らない。沈みもせずして中途でフランシして居ると、何時までも浮上する事は能ぬ。一旦水の底に沈んでからでなくては浮上れるものでない。私が道徳實行を説かぬと云ふも、懸に徹底の碍げとなるからである。何を差措いても徹底が急ぐのである。

乃て愈徹底すると、此世の因縁終るなり無上菩提を得て眞如法性の境に住し、佛の淨土にゆく。淨土に行つ

たなら、ソコで還相廻向は自然にできる。彼の『正信偈』の……即ち眞如法性身を證し煩惱の林に遊んで神通を現はし、生死の園に入て應化を示す……である。佛は御眞實によつて我を救はんとし玉ひ、我々が助けて頂くと此の煩惱の花盛り、生死の林の中に再び現はれて、思ふが如く衆生を利益することが出来るのである。そこで要するに私共重い煩惱の荷物を持つて、生死の海に浮んで居るものは、此我を救はんと大悲の願船に棹して迎へ玉ふ御眞實を戴ければ、大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮かびねれば至徳の風靜かに衆過の浪轉ず……となるのである。諸佛菩薩の力で助らぬ我々の病氣を、阿彌陀佛の手で助けらるゝのである。然るに真宗の信者は諸佛菩薩の力が足らぬと云ふ様な態度を示すのは、間違つた次第、私の方が罪深くして諸佛菩薩が、善をせよ惡をせなと云うて下されても、その通りに私の方ができぬのである。そのできぬ私を心配する助けてやるぞよと阿彌陀佛の廣大なる御慈悲であれば、乃て有と有ゆる諸佛神々も此名藥の發明を讚嘆せらるゝと云ふものである。心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神は護らん。て佛の此廣大なる眞實を信じたならば、祈らずとも諸佛諸菩薩神々はお護り下さると云ふものである。乃ち我々は南無阿彌陀佛一つで日暮さして貰ひ、南無阿彌陀佛一つを以て報謝をさせて戴くのであります。

求道會館建築經過報告

多年大方諸彦の御高配をいたさました求道會館も、時機純熟して本年五月起工していただきことになりました。御蔭によりて久しからず峻功する運になりました。是全く佛力の然らしむるところにして、悉く大方御同情の結晶と、深く感佩し奉る次第であります。茲に其經過を報告して、共に喜んでいたさきたいと思ひます。

本會館の設計は、京都工藝學校教授工學博士武田五一氏が、多大の同情を以て寄附して下さつたのであります。特に經費を節約し得らるべき最少額を以て、堅牢なる永久的建造を作らんとする點に於て、非常に苦心を費して下さつたのであります。是本會館の實現につきて永久銘記して忘るべからざる高恩であります。而して受負師戸田組は特別の勤勉と義氣とを以て、工事實施の任に當てていただきいたのであります。而して其忠實なる努力によりて、着々工事進捗して、正に千載一遇の御即位式大禮の時に當りて落成を告げることになりました。

回顧しますれば、明治三十六年六月、堅めて趣意書を發表し、先づ現今の會館敷地を購入したるを第一着手とし、諸彦の同情によりて基礎を定むることを得ました。而して明治四十四年再び世話人の方々の御親切なる御助成をいたさき、大方諸彦より多額の御喜捨を頂きました。遂に今日の結果を見るに至りましたことは、一々皆白毫の恩賜として感激措く能はざる次第であります。而して本年起工

の時に至り、敷地の狹隘を告ぐると共に、本建物が永久隣家の目障となるべきを以て、其德義を全うせんが爲に隣家を買取りたると、建物を永久的になさんが爲に煉瓦石造になしたる爲に、別項會計報告の如く猶多分の不足額を生じたる次第であります。甚だ厚がましさの至りなれど、庶幾くは大方諸彦の御同情を仰ぎて、茲に決算の完成を見んことを、至願の至りであります。

本年は歲乙卯に次りて、聖德太子、親鸞聖人を記念すべき年であることは、嘗て發表したことあります。即ち推古天皇三年乙卯歲正月八日に、聖德太子法隆寺本願縁起を書せられ、其後六百六十年を経て、建長七歲乙卯十一月晦日、親鸞聖人が皇太子聖德奉讚を書かれたのであります。而して其後六十年を経て本年の乙卯歲になりました。此歲に當りて御大禮を行はせらるゝさへあるに、恰も十一月晦日は御日取治定最後の日に當る次第なれば、此日を以て本會館の落慶式を行ひ、引續き乙卯記念講演を開かうと思ひます。中央首都の諸彦は勿論各地同朋諸彦舉て御來會あらむことを御待受けいたします。

求道會館落慶式 十一月三十日午後一時

乙卯記念講演

十一月一日より三日まで

毎日午前九時十七憲法講義

每夜午後六時公開講演

會館建設之概論

地坪面積九十坪三合の煉瓦石造二階建でありまして、間口四十尺奥行八十尺であります。前面玄關は清新高雅なる最新式の構造にて、人造石の莊重なる柱櫛と、嚴丈なる礎石とは、先づ一見端正の感を起さしめ、玄關屋上には左右一對の鐵鑄の燈籠を安置し、二階五連窓は瀟洒たるスティンド硝子をあしらひ、猶三角形をなせる前壁を高く算えて、記字くづしの人造石を以て其端を嚴正ならしめ、全面通茶色のマイルを張り、フクリンメッシュを以て之を裝飾し、玄關の床には全面タイルを張りつめ、扉は三ヶ所に開き、何れも二重になりて戸外の音響を遮り、注意周到にして見附の立派なるは本會館の特色として誇とする所であります。此玄關を入れば幅四十尺奥行五十四尺の大會堂であります。正面には木造の六角堂形の堂が、半分前面に凸出し、半分後方に凹入して作り附けてあります。其上には石膏作りの虹がありて、其莊麗典雅言はん方なし。其堂は優秀なる檜木の白木作りにして銅板を以て屋根を葺き、プラットホーム亦檜作の廣潤なるものにして、同檜作りの卓を安んするなり。階下は椅子を用ひ、階上はガレリー作りにて、雑壇は疊上に坐する様になれり。若し著しく詰めこむ時は約千人を入るべし。後面は階下は三間に三間半と三間に三個の西洋室とし、各ストーブ電燈飾ありて、圖書室、應接室に充つべし。猶側面に三尺の廊下ありて、引續きて階段を上れば、階上には三間に六間半の一室ありて小會堂と呼んで居る。二間床ありて疊敷の日本室である。從來の信仰談話會に充てるつもりであります。猶大なるストーブありて、床板もまさかのには時西洋間となし得られる様に

出來て居る。猶階段下は湯呑場に充てられてある。便所は戸田主人の好意によりて別建になつた。會館外面は堅牢なる煉瓦柱を以て支へ、階上階下腰を洗出しとし、金壁モルタル塗り、屋根は石綿板にて張り、避雷針、雪止工事あり。地下の下水工事、室内的電燈工事注意周到である。即ち木材を以て鐵骨式に組み立てたものであります。而して室内、小屋、床、器具に至るまで一切光澤を出さず。クレオソートに色素を入れた宗教的建造として最も適切なる質朴清淨の趣味をあらはして居る。而して香川縣の長尾猛師は白峯山より産出せる珍らしき大なる磐石を寄附して下さつた。特別の裝置して壁に懸け之を擊てば轟轟の韻が鏗として四隣に響き渡るのであります。

口繪第一葉は本會館工事の十月末の出來上り形を正面より撮影したるもの、又第二葉は七月月中旬初煉瓦積み工事中を正面よりうつしたものであります。

求道會館設立會計概算報告

入之部

總金額壹萬八千六百拾一圓五十八錢也

内
　　譯

一 壱萬六千五百參拾五圓參拾七錢也
　　(壹萬五千參百五拾九圓七錢也)
一 千百七拾六圓參拾錢也
一 壱千七百參拾六圓九拾參錢也
一 參百參拾九圓貳拾八錢也

出之部

總金額貳萬五千百八拾貳圓八拾參錢也

内
　　譯

一 貳千四百圓也
一 五百七拾貳圓八拾壹錢也

明治三十六年十一月第一回敷地地上
權占有の爲家屋購入費
同上に付借入金に對する明治四十一
年六月までの利子合計

一五百七拾圓七拾六錢也

貳百七拾圓七拾六錢也

一七百六拾三圓四拾貳錢也

參百八拾圓四拾貳錢也

貳百五拾圓四拾貳錢也

一參千壹百參拾貳圓九拾貳錢也

一壹萬四千圓也

一壹千圓也

一七百四拾貳圓九拾貳錢也

差

金六千五百七拾壹圓貳拾五錢也

不 足 總額

明治四十四年再發表に付印刷費、郵
其後謝狀印稅、雜誌報告、雜費
大正四年四月起工の時、第二回敷地地上權占有
のため家屋購入費並に其模様賠償金

御本尊御禮金	第一回設計製圖料
工事準備家屋移動費半額支出	工事準備家屋移動費半額支出
水道等起工費	水道等起工費
監督費、上棟式費及此種諸費豫算	監督費、上棟式費及此種諸費豫算
電話備付品落慶式豫算	電話備付品落慶式豫算
地代一部の補助	地代一部の補助

右は切込み得られる限りの最少額を以て豫算を立て、皆様より多年任意に御喜捨下さ
れたる御蔭にて自然に積りたる寄附金を以て之に充て、此の如き結果を持來したる次
第であります。洵に理想的寄附にして眞の淨財の凝結と深く感謝する次第であります。
而るに我々世話人には此不足額を可成速に補充して圓滿なる結果に達せんこ
とを希望して止まぬ次第であります。冀くは一層廣く江湖諸彦の贊助を仰ぎて新に御
喜捨を願ひ、目的を貫徹したいと思ひます。猶從來其御志ありて御申込をいたゞく機
会を得ざりし方々に御喜捨をいたゞき、又御申込いたゞきて未納となれる方々に何卒
此際奮て御納附をいたゞいて、多年の宿望を満足せしめて下さるやう、深く折入て
御願申します。

大正四年十一月十日

世話人總代 長尾收一
會計監督 西澤善七

求道會館建築寄附金第十二回報告

(十月末まで)

四

一金壹千壹百圓也(第二、三分)

牛込 檜山 錦光殿

一金壹百圓也

千葉 茂木啓三郎殿

一金壹百圓也(第四回)日本橋

福岡 久保猪之吉殿

一金壹百圓也(第二回)小石川

福岡 橘地龜次郎殿

一金五拾圓也

牛込 瀧澤 三郎殿

一金五拾圓也(第二回)

生込 伊藤きい子殿

一金五拾圓也

芝 園田令夫人殿

一金拾七圓五拾錢也(第二、三分)

神田 無名 氏殿

一金拾五圓也

高松 (横田) 折惠殿

一金拾五圓也

同 瑞穂殿

一金拾五圓也

有志者殿

一金拾五圓也

新宿 荒井 平吉殿

一金拾圓也

浅草 春日 政子殿

一金拾圓也

大連 山下 興家殿

一金拾圓也

芝 増田善兵衛殿

一金拾圓也

日本橋 澪谷 淳藏殿

一金拾圓也

同 無名 氏殿

一金拾圓也(第二回)

熊本 竹下 秀道殿

一金五拾圓也(第二回)府下長尾收一殿
一金參拾五圓五拾錢也(第二、三四回分)

横濱 前田清次郎殿

一金參拾圓也

熊本 林田 弥作殿

一金參拾圓也

福岡 無名 氏殿

一金參拾圓也(第二回)日本橋

廣島 清水かつ子殿

一金貳拾圓也

廣島 渡邊 良法殿

一金貳拾圓也(第二回)

大森 無名 氏殿

一金貳拾圓也

熊本 古林田たみ子殿

一金貳拾圓也

有志者殿

一金拾圓也(第三回)福岡 上田定次郎殿
一金拾圓也(第三回)大分和才誠司殿

福岡 中村松太郎殿

一金拾圓也

福岡 泉原 寛海殿

一金拾圓也

宮崎 藤川 正蓮殿

一金拾圓也

同 佐々木よし兒殿

一金拾圓也

大森 開定次郎殿

一金拾圓也(第二回)

神田 加藤てる子殿

一金拾圓也

日本橋 杉谷ゑい子殿

一金七圓也

本郷 松井 房吉殿

一金五圓也

神田 修道保護會殿

一金拾圓也(一燈)

石井 商店殿

累計金壹萬六千五百參拾五圓參拾七錢也

右之通り候也

大正四年十一月十日

世話人總代長尾收一
會計監督西澤善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存候茲に謹みて感謝候也

近角常觀

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候
當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の
文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候

二、寄附金領收の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候

三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

浩々洞編 東京巢鴨町二ノ三五
清澤全集第三日記及五印錄 振替東京三一二二番
浩々洞無我山房

最菊版六百頁布綴天金刊
定價金一圓
特價一圓七十錢
郵稅十一錢

本書は先生一代の日記及び書翰を輯錄し、これに先生の朋友知人たりじ南條氏、村上氏、近角氏、澤柳氏、岡田氏、上田氏、稻葉氏等數十人の口より語られたる先生の實際生活の叙述を集めたるものである、學生時代、教師時代、教界雄飛時代、肺病靜養時代、家庭破壊時代、信仰復活時代の先生の眞面目が如何に活躍してをるか

清澤全集全部完成

■清澤全集 第一哲學及宗教 金二圓五十錢郵稅十二錢
■清澤全集 第二信仰及修養 金二圓郵稅十二錢
拾一月二十日限り全三冊特價金五圓五拾錢(郵稅不用)

第八版

懺悔録

「鉄異歎」録附

定郵袖
價稅珍
十
四
美
錢
本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる「歎異鉄」の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に講述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實状と其後に佛陀攝取の慈光に接し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下、唯救濟の一途ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔録』の名ある所以にして一讀入信の人少からず

昨年
度分

求道合本

定價壹圓
郵稅八錢
クロス綴

求道發行所

告

本誌は多年間一定の定價を支持致居り候處、今回從來の四六版四〇頁型を改め、菊版六四頁型に革新仕り候に就ては、此の際次記の如く定價に改定を加え候間、今後御購讀御申込みの向きは、その御積りにて奉願上候。猶ほ從來前金御預り置きの分は、本號以下改定々價に換算仕り候間是又同時に御含み置き願上候也、

一部定價金拾參錢郵稅壹錢
一年分(六冊)郵稅共金八十錢

大賣捌所

(東京市本郷區森川町一一番地)

大正四年十一月十五日發行

地番一町川森區郷本市京東

番六九六六一京東座口替振

求道發行所

(東京市本郷區森川町一一番地)

大正四年十一月十二日印刷

地番一町川森區郷本市京東

番六九六六一京東座口替振

(東京市本郷區森川町一一番地)

大正四年十一月十五日發行

地番一町川森區郷本市京東

番六九六六一京東座口替振

一部定價		一部郵稅		六ヶ月郵稅共		一年郵稅共	
金	拾參錢	金	壹錢	金	八拾錢	金	壹圓五拾錢
●廣告料五號活字一行(二十六字詰)一回金拾錢							

木誌は毎月一回十五日發行とす
前金はあらざれば御法文に應ぜず
郵券便爲替用の事に付金は可成振替貯金口座にて御送金の事
郵局代用の事に付金は可成振替貯金口座にて御送金の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一一番地求道發行所」と
せらるべし
木誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の
節は新舊兩所の宿所を通知する事に當る
回答を要せらるる如きの方は相當の返信料を添ふべき事

大賣捌所 東京市本郷區森川町一一番地
求道發行所 (浪替口座東京一六六九六番)
發行人 白近角士幸常
編輯人 印刷人
力音觀

講 話

毎日 喬午前九時
毎土 喬午後二時
每月三日午後七時
第一二求道會
第三求道會

『木郷區森川町一番地』

『九段坂佛教俱樂部』

『日本橋郷穀町說教所』